天國の鍵

日曜學校劇集

カワムラ・マコト著

Y5
609

日曜學校劇集

天國の鍵

カワムラ・マコト著

基督教出版社刊行

昭・ウ・十一・十五・受入
帝國圖書

RELIGIOUS LITTLE PLAYS & DIALOGUES FOR LITTLE PEOPLE

Y5
609

國立國會
55.5.21
圖書館藏書

80W19915

目次

幸福な手紙（一幕）……三
可愛い仙女（一景）……一九
天國の鍵（一幕）……二九
サンタ・クロース（一景）……四一
よろこびの星夜（二景）……五三
心聖き者は幸福なり（二景）……六五
金の斧銀の斧（一幕）……八一
カンタベリイの羊飼（三場）……九一
一つの靴（一景）……一〇五
お留守番をした羊飼（三景）……一一七

叙

私は微力ながらこれまで數年の間、童話劇――特に兒童の情操的教育を目的とした子供のための劇を書くことに、力を注いで參りました。單なるお話的な童話より、劇はたしかに兒童に對して、大きな強い感化力を有つてゐると、確信して居るからであります。

外國には、そうした方面のリトル・プレイが、おそらく今迄私の目にふれてゐるかぎりに於ても、隨分よいものがある樣に感じられます。しかし、非常にそれがよいと思はれるものでも、日本の子供達がそれを其儘演じるには、色々の點に於て不便や難解のものがあることに氣がつきます。ですから、出來れば日本の子供達のためには日本人が書きおろしたものを脚本にとることが、理想的であるわけですが、今日未だそうした方面のものを專門に書く人が、極く稀であることは遺憾に思はれます。勿論それが色々の有名なお話の劇化でもよいでせうし、また、飜案でも結構であると思ひます。ただ要は、日本の子供達にとつてもぴつたりと來る樣に、書かれてあれば難はないと信じます。

私はいまこの本の中へ、自分の原稿紙にかいたものの中で、主として宗教的な氣分に富んだもののみを拾篇撰び出し、クリスマス祝祭に用ひられるものを主眼として、まとめてみました。この前に「心の鐘」や「鶯鳥祭」にまとめました、それらの對話小劇に比して、今度の「天國の鍵」は皆、演出に關しては極く容易であること、又、作品としましても決してそれらに劣つてはゐない、と自分では信じて居ります。私は一層自分の精進のため、只管皆樣のステーヂで實驗の上、尙足らざる處の御教示を仰ぎ度く存じ居ります。

著者識

幸福な手紙

幸福な手紙

一幕

挿繪・裝幀

伊楚子

時・　クリスマスの晩
處・　正男さんの部屋
人・　正男さん
　　太郎さん（友達）
　　眞吉さん（友達）
　　正男さんのお父さま
　　アナウンサア（ラヂオの後にかくれてゐる人）

部屋の樣子――部屋の左右は出入口になつてゐる。中央には、テーブルと三脚の椅子（或は、日本風の机でもよい）。つきあたり右手の壁際には、ラヂオ・セットがある。（布をかぶせた箱か何かの上に、スピーカアだけおいたものでもよい。その箱の後蔭に、アナウンサアになる人がかくれてゐる）。左手には、小さな美しくかざられたクリスマス・ツリーが置かれてある。（註・すべて以上のスピーカア並にツリーはボール紙を切抜いて描いたものでも間に合ふ）。

今、三人はテーブルに向つて、一つの手紙を中にして話し合つてゐる處で、幕が開く。

太郎　僕の處には、まだ返事が來ないんだよ。不思議だなあ。

眞吉　若しかしたら、君のかいた宛名が間違つてゐたんぢやあないかしら。

正男　いつ出したの？　その手紙。

太郎　幾度も幾度も書きなほしてゐて、おそくなつたから、いそいでおとといの朝ポストへ入れたんだよ。

正男　おとといー？　それぢやあ、もうとつくにサンタのお爺さんは、出かけちやつたあとにつくわけだよ。この返事には、此處一週間内には必ず出發します、とかいてあるんだからね。

太郎　ぢやあ、折角出しても間に合はなかつたのか、殘念だなあ！

正男　そうだ。おそかりし……だね。まあ僕の處に來たこの手紙、讀んでみたまへ。

眞吉　どら、僕がよんであげよう。

（開いてよむ）

幸福な手紙

「正男さん

かあいいお便り有難度う。毎年このサンタ爺やを忘れずによこしてくれますね。

また一年ぶりで、元氣な皆さんにお目にかゝれるのが、何より樂しみです。

今年は、いつもの豫定より持つて行くプレゼントが澤山になり、荷物が橇につみきれませんから、大きな特別仕立ての飛行船に乘つて行くつもりです。サンタ・クロースにとつて、こんなうれしいことはありません。なぜなら、よい子供が澤山になつた證據ですから。どうかクリスマスの晩を樂しみに待つてゐて下さい。

では、さようなら。

雪國の

サンタ・クロース　より」

太郎　やあ、サンタのお爺さんが飛行船で來るんだつて、今年は？

眞吉　すばらしいなあ。前代未聞の大快事だ。大きな飛行船にプレゼントを山の樣に積んで、空を飛んで來るんだ！

正男　その樣子をこうして考へてみただけでも、いゝなあ！　それにしても、今頃はもうどの邊に來てゐるかしら。

太郎　さあ、もうそろそろ着く時分だらうねえ。だが、このひどい吹雪では、心配だなあ。この分ぢやあきつと海の上はもつと猛烈だぜ。

正男　ぢやあ、ラヂオのスキッチを入れておかう。きつと子供のニュースの時間には着陸の樣子がわかる筈だから。

（正男は立つて行つてスキッチをいれる。クリスマスの音樂がすぐはひる――これは後にかくれてゐるアナウンサアになる人が其處でレコードをかければよい）

眞吉　まだ、ニュースの時間ぢやあないね、丁度クリスマスの音樂だよ。

正男　今年は、何が貰へるかなあ。去年は僕は靴だつたが。

太郎　僕は、金のペン先のついた萬年筆だつた。

眞吉　僕には、赤い自轉車だつた。

正男　でも、サンタのお爺さんは、僕達の好きなものを、よくも知つてゐるねえ。

太郎　僕も、不思議で仕方がないんだよ。

眞吉　たしかに、どこかで僕達の一人一人のことをちやんと、見てゐるにちがひないんだ。そうして、その子供の好きなものをもつて來てよろこばせて呉れるんだよ。

正男　僕達の先生や、お母さまやお父さまのおつしやることを、よく一年中いつも守つてゐれば、きつとサンタ・クロースは來てくれるよ。

（その時、ラヂオの音樂は終つて、アナウンサアの聲）

正男　おや、僕達のニュースの時間だよ。靜かに聞かう。

ラヂオ　皆さん、只今より子供のニュースのお時間です。今日はクリスマスですから先づ何より最初に、お祝ひの御挨拶を申上げます。

皆さん、クリスマスお目出度う！

さて、一週間程前に、雪のお國を出發した我等のサンタ・クロースの大飛行船は、今夕その姿をセント・マヂック島の北方にあらはしましたが、我近海に近づくにつれ、濃霧と猛烈な吹雪のため、航行困難におちいつた模樣にて、その後の消息は全く不明におちいつて居ります。只今、さかんにその行方を搜索中ですから、いづれわかり次第おしらせ致します。では、皆さんしばらくお待ち下さい。

正男　やあ、これは一大事だ！

太郎　困つたなあ。やつぱり吹雪にやられちやつたんだ、僕が心配してゐた通り。

眞吉　ぢやあ、早速このことを、みんなにも知らせて來よう。

正男　そうだ、すぐ出かけよう。

（正男は、ラヂオのスヰッチを切つて、一同と右手に退場。間もなく、お父さまが左手より登場。一束の同じ樣な封筒にはひつた手紙をかかへてゐる。あたりをみまはして）

お父さま　おや、おや、子供達は誰も居ないぞ、今迄話し聲が聞えてゐた樣だつたがどこへ行つたのだらう。そうだ、これは丁度幸ひ、今夜わしがほうぼうの家の子供達にそつと配つてまはらうと、今迄かかつてやつと書きあげたこの手紙を、あの子供達にも一つおいて行つてやらう。歸つて來て開けてみたら、さぞ、おどろくことだらう。

（お父さまは、三通の手紙をその中からぬきとり、テーブルの上にのせて）

どうれ、こうしておいて、これからわしはそのサンタ・クロースのお使ひになつてひとまはりして來よう！

（お父さまは、微笑みながら又左手に退場する。部屋には誰も居ない。部屋の外から合唱が聞えて來る）

チンチンチンチン　鈴が鳴る
どこからひびくか　わからない
不思議な鈴だよ　あの橇は
姿は見えない　音もない
鈴だけ聞へて　雪空を
何處まで走つて　行くのだろ
クリスマスには　不思議だな
知らないその間に　橇が來て
贈物をば　おいて行く

（合唱の終る頃、三人話しながら右手より登場。ラヂオの前に立止つて）

正男　まだ、其後のニュースはないかなあ！
眞吉　心配だね。スキッチを入れておいた方がいいよ。

正男　そうだ、いれておかう。

（正男、スキッチを入れる。ラヂオからは再び美しい音樂が聞えて來る）

太郎　若し海の上で遭難すれば、サンタのお爺さんが幸ひ用意のパラシュートで降りた處で、駄目だね。

眞吉　うん、そうなれば全く絶望だよ。しかし、風の工合で機體は案外陸の方へ吹流されてゐるかも知れないから、それはわからないがね。

正男　いや、僕は必ずサンタのお爺さんは、僕達の處へ來て呉れると信じるよ。

太郎　（ふと、テーブルの上の手紙に氣がついて）おや、妙なものがのつてゐるぞ。

二人　どらどら……（テーブルのそばによって行く）

太郎　（一つをとりあげて）やあ、これは太郎君とかいた僕への手紙だ。いつたい誰からだらうな。（裏を見て）やあ、サンタのお爺さんからだよ。

二人　そうだ、僕たちのもそうだ！

正男　いつ來たのだらう、此處へ。不思議だなあ。

太郎　ほんとに、不思議なこともあるものだねえ。

眞吉　みんな、いつしよに開いて讀んで見ないか、どんなことがかいてあるか。

二人　そうしよう。きつと、いい便りにちがひない。

（三人、封を開いて、中から全く同じ樣な手紙を取出す）

三人　（いつしよに）

「若しも、サンタ爺やがあなた方に、何もおもちややお菓子の贈物をもつて來なかつたと云つて、決してこのサンタ爺やをうらんで下さるな。サンタ爺やを待つてゐる子供は、きつと世界中で心の美しい、いい子供達にちがひない。來る年々のクリスマスには、いつまでたつてもなくならない、いつまでたつても人々をよろこばすことの出來る、イエスさまの美しい愛の心を新しくいたゞいて、あなた方の心をそれでみたすのが何よりぢや。それこそ、このサンタ爺やの最上の贈物ぢや

よ。

おもちややお菓子もいいけれど、若しも途中で飛行船が、暴風雨のためにおつこつてしまつた時を、考へてもみてごらん！　お菓子やおもちやはなくなつて、さて、あなた方をよろこばすために、何一つあげることが出來ようか。

これからクリスマスには、いつまでたつても變らない、どこへももつて行くことの出來る、愛の心をお互ひに贈物に致しませう。わかりましたね、では、さようなら。

サンタ・クロース　より」

（その時、ラヂオの音樂急に止んで、アナウンサアの聲）

ラヂオ　皆さん、音樂の途中ですが、先程のニュースでおしらせ致しましたサンタ・クロースの其後の模樣が、只今とどきましたからおしらせ致します。

吹雪のため遭難したと思はれましたサンタ・クロースの大飛行船は、不幸にして大破し、日本アルプス方面に墜落燒失致しましたことが、捜索隊の手によつて判明致しました。しかし、サンタのお爺さんは、無事燒失よりのがれ得て、かねて用意して參りました橇にのりこみ、快速力でみなさま方のお家をまはつてゐる模樣ですから、とりあへずおしらせ致します。

（音樂つづく）

正男　やつぱり、そうだつたのか！

太郎　それぢやあ、ほんとに來て呉れたんだなあ、快速力のソリで。

眞吉　僕は、もうおもちやよりお菓子よりこの手紙が何よりうれしいよ。そうして、サンタのお爺さんが無事だつたことが。

太郎　そうだ、これは僕達にとつてすばらしい贈物だ！　サンタ爺やの最上の贈物なんだ。

正男　僕も、もうこれ以上何もほしくない。ようし、來年はきつとサンタのお爺さんを、逆に僕らがよろこばせてやるぞ！　この手紙にかいてある樣にして。

太郎　そうしよう！　ねえ、眞吉君！　三人で約束しよう！

（三人固く手を握り合ふ）

眞吉　ぢやあ、三人であの行つてしまつたサンタ爺やにお禮のために歌をうたつてやらう。きつと、どこかで聞いてゐてよろこんで呉れるにちがひないから。

正男　それがいい。

太郎　では、元氣よくサンタのお爺さんのためにうたはう。

（三人うたふ）

チンチンチンチン　鈴が鳴る
どこからひびくか　わからない
不思議な鈴だよ　あの橇は
姿は見えない　音もない
鈴だけ聞えて　雪空を
何處まで走つて　行くのだろ

クリスマスには　不思議だな
知らないその間に　橇が來て
贈物をば　おいて行く

ほんとによいひと　サンタ爺
ありがとありがと　ありがたう
お禮を云ひます　心から

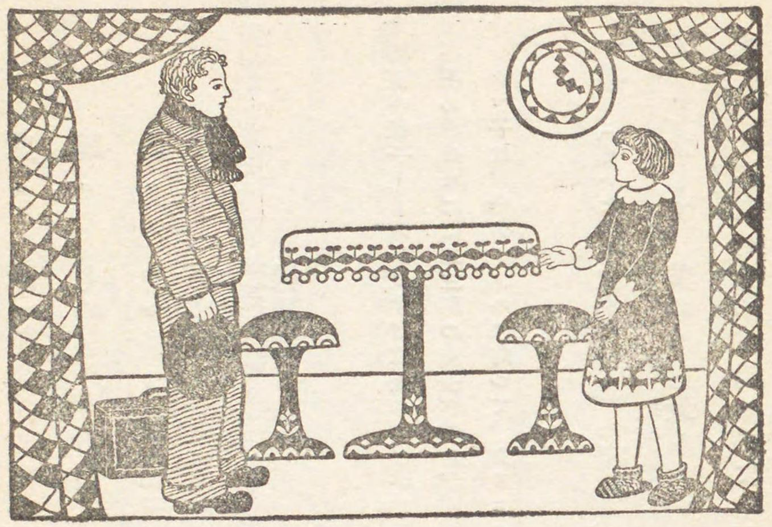
またクリスマスを　たのしみに

天國の鍵

もつとよい子に　來年は
みんなでなつて　待ちませう

（合唱終る頃に、しづかに……）

幕



可愛い仙女

可愛い仙女

一景

處・　タマ子さんの家の玄關に接した一室

時・　その日の夕方頃

人・　タマ子（十二三歳位）
　　お母様
　　樟腦賣

場面の様子――左手はすぐ玄關につづいてゐる。右手は奥の部屋につづく一室で、中央にテーブルがあり、そのまはりには二三脚の椅子がある。

タマ子は、今テーブルに向つて、クリスマスに演じる自分の暗誦を練習してゐる。

タマ子　（書いた紙を讀みながら）「げに、信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなくのこらん。しかして、其のうち最も大いなるは愛なり。」まあ、隨分長いわ。もういよいよあしたの晩にせまつてゐるのに、どうしても、まだはつきり覺えられないの。

（その時、右手にお母さまの聲。）

お母様　タマ子さん？　タマ子さんはどこなの？

タマ子　此處よ、お玄關の方よ、お母さま……

（お母さまは、小包をつつんだ風呂敷包を抱いて、右手より登場。）

お母様　あのね、あたしこれから郵便局へ小包出しに行つて來ますから、ちよつとおるすゐしてゐて下さいね。

タマ子　叔母様へのプレゼントでしよ、それ？

お母様　ええ、そうよ。早く出しておかないと、あしたのうちには着きそうもないから。

タマ子　ええ、あたし、此處でおるすゐ番してゐますわ。

お母様　では、お願ひしますよ。

（お母様は左手に退場）

タマ子　あたし、今度は目をつぶつて一度やつてみるわ。（目をつぶつて）「げに、信仰と希望と愛と――此の三つの者は――限りなくのこらん。――しかして、そのうち――最も大いなるは愛なり。」

あら、とうとう云へちやつたわ、みんな。もう大丈夫よ。だけど、あたしお寢坊だから、今晩ねたらまた忘れてしまふんぢやあないかしら。何だか、心配だわ。

（その時、左手に聲がする――姿は見えない。）

樟腦賣　（太い聲で）ごめんなさい！　今日は！

タマ子　はい。（立つて、左手の入口に行く）

樟腦賣　今日は、お嬢さん！　樟腦を買つて貰へないでせうか。私は、ある鐵工場の職工だつたんです。しかし、ごらんの通り機械で腕をやられてしまつたので、工場の方はすぐクビになるし、私達家族の者はこの不慮の災難のために、全く食べるに困つてしまつたのです。

タマ子　まあ、お氣の毒ですこと、それは……ほんとに。そうして荷物を片手でもつて歩いてゐては、さぞ大變でせうね。まあ、ここで少し休んでゐらつしやいませんか？

（タマ子はイスを一つとつて、すすめる。樟腦賣は、おづおづした樣子ではひつて來る。片腕がなく、黑い帽子をかむつてトランクを下げてゐる。）

樟腦賣　お嬢さん、ではちよつと休ませていたゞきます。

（彼は、トランクを床におろして、帽子をぬぐと、イスに腰掛ける。）

お嬢さん、私は今朝早くから街中をかうして歩きまはつて居るんですが、どこの家でも一つだつて買つては呉れないのです。棒の樣になつた足をやつとひきづりながら、今度こそはと恥しい思ひをしながら、思ひきつて玄關を開けると、まだこちらが一言も云ひ出しもしないうちに、ケンモホロホロにことはられてしまふのです。そうした家の玄關には、立派なオーバーや帽子や靴が、づらりと並んでゐます。奥

の方からはピアノの音さへ聞えてゐます。お金はあり余つてゐるのに、この一包たつた十錢の樟腦一つさへ買つてはくれない、何んと云ふッベタイ奴らだらう、この人情知らず奴が……と、私の頭はついカーッとなつてくる、いつそのこと、此の土足のまま上つていつて毆つてやらうか、それとも、この立派なオーバーか靴をとつて逃げてやらうか、と云ふ氣まで起つて來るのです。でも、お嬢さん、私はどんなことがあつても前科者にだけは、なりたくはありません。子供達のことを考へると可哀そうです。でも又、ちつとも賣れない空の財布の中のことを思ひ出すと、又しても惡い心も起つて來るのです。お嬢さん、全く私はそのことを考へると泣き度くなつてしまひますよ……。

タマ子　ほんとに御同情致しますわ。では、小父さん、ちよつと待つてゐて下さいね。

（タマ子は右手にいそいで去る。樟腦賣は腕組みをして、ゴム靴の先をすり合はせながら、考へこんでゐる。やがて、タマ子がもどつて來る）

タマ子　あの、小父さん、これね、私のおこづかひですの。ほんとにすこしですけれど、遠慮なくもつて行つて下さい。

（タマ子は、五十錢銀貨を二枚樟腦賣のテーブルの前に出す。樟腦賣はそれを見て、おどろいて首を横にふりながら。）

樟腦賣　まあ、お嬢さん、これは大變なお金です。あなたが、やさしく疲れてゐる私を休ませて下さつたもんですから、つい氣がやはらかくなつて、泣事を云つてしまひました。私はあなたの樣な子供さんのおこづかひまで、取りたくはありません。お嬢さん、これはしまつておいて下さい。

タマ子　いいえ、いいのです。まだ私には少しばかりのこつて居りますから。それにあしたはクリスマスで、お母さまにおこづかひも頂けるのですから。

樟腦賣　いいえ、いけません。是非しまつておいて下さい。あなたの樣なやさしい方もこの世の中にゐなさると云ふことを知つただけでも、私は涙の出るほどうれしい

のです。お嬢さん、これはどうせ持つてゐても賣つこのない樟腦です、みんなおいて行きますから使つて下さい。

（樟腦賣はトランクをテーブルの上にとつて、中から樟腦を取出そうとする）

タマ子　（あはてて）まあ、小父さん、そんなこと……でも、きつとそのうちには何處かで買つて呉れますわ！

（樟腦賣は、樟腦の包みを五つテーブルの上に出して、空になつたトランクを手に持つと立上り。）

樟腦賣　お嬢さん、長い間休ませて頂きました。ではごきげんよう。

（彼は玄關の方に去らうとする。タマ子はいそいでテーブルの上のお金をとつて。）

タマ子　小父さん、お願ひです。このお金をもつて行つて下さいな。そうしてこれで皆さんで御飯でも食べて下さい、ほんとにわづかばかりですけれど。私は、これをみんな困つた方にあげたからつて、別にこまることはないのですから。ほんとにお願ひですから。受取つて下さい。

（樟腦賣はやや考へてゐるが、やがて。）

樟腦賣　お嬢さん、あなたがそれ程までにおつしやつて下さるのなら、私もよろこんでいたゞきませう。きつと〳〵正しい道を歩んで行きます。腹が立つた時には、やさしいお嬢さんのことを考へませう。家に歸つたらきつと手紙を書きます。その手紙をごらんになつたら、ああ、いつかの樟腦賣の男だと思ひ出して下さい。私もそのうちにはきつと、何處かで職をさがしてみせます——あはれな、片腕の片輪者ですが、誰か同情して使つて下さる方もあるでせう。では、お嬢さん、ごきげんよう色々と御親切に有難うございました。

タマ子　では、小父さん、折角お大事に、さようなら！

（樟腦賣は左手に退場。タマ子はその後をしばらく見送る。）

タマ子　（ひとりごとの樣に）お氣の毒な小父さん、小父さんは泣いてゐらつしやつたのだ。神樣のお護りがなければ、あの小父さんはきつと、とんだ不幸になつておしま

ひになるのだ。私は、これからいつも、陰ながらあの小父さんの上に神様のお恵みをお祈りしてゐてあげませう。

（美しい音樂で靜かに……）

幕

附記・　この對話劇は、「樟腦賣と妙子」と云ふ長坂龍太郎氏作（「石の枕」載錄）の童話を、脚色補筆したものであることをお斷り致しておきます。

天國の鍵

一幕

處・　天國の門の扉のついた一室
時・　いつでもよい
人・　神様
　　聖ペートルス
　　仕立屋

場面は、左手にあたり小さな金色の天國の扉があり、そこをはひると、すぐ神様の玉座のある一室になつてゐる。部屋の左手（即ち、扉をはひつて正面）には、神様の玉座――金銀寶石をちりばめた肘掛椅子があり、中央には一つの美しいテーブルがおかれて、大きな本がのつてゐる。玉座の左手には、花瓶臺があつて、その上には花の挿さつてゐない金色の一輪挿がのつてゐる。
今、神様は散歩にお出かけにならうとして、聖ペートルスに話して居られるところで幕が開く。

神様　わたしは、これからしばらく花園を散歩して來ますから、お前は、その間留守番をしてゐて下さい。若し、私の留守中に誰か訪ねて來たら、門の前でしばらく待つて居る樣につたへて下さい。

ペートルス　はい、かしこまゐりました。必ず、そう申しつたへませう。

（神様は門から出て、左手に去る。ペートルスは、イスを扉のそばに持つて行つて腰掛ける。そして、手にもつた本をよみはじめる。間もなく、門の向ふに一人の仕立屋が姿をあらはす。非常に疲れた樣子で、その前に一度立止り、あたりを見まはしてから、そつと扉に近づく。）

仕立屋　（扉をたたいて）もしもし、お願ひでございます。

ペートルス　（本から眸をはなして）どなたですか？　お名前をお告げ下さい。

仕立屋　私は、貧乏な然し正直な仕立屋でございます。

ペートルス　何に、正直な仕立屋と申すのか。しかし、お前はいつも仕立臺の下にお

つこつた布地のきれ端を、どうしたと思ふか？

仕立屋　おお、そればかしのことは罪にはなりますまい……どうぞ、あはれな仕立屋に御慈悲をおたれ下さいまし。

ペートルス　隨分自分勝手なことを申す男だな。しかし、今神様は生憎と散歩にお出

かけになつてゐて、お留守なんだ。神さまは、御自分がお留守の間は、誰が參つても入れてはいかんと云ふお申しつけだ。

仕立屋　そんな意地の惡いことをおつしやらずに、特別のお惠みでお通し下さいましひとりでにおつこちた仕立臺の下の布屑なんどは、盜むなんて云ふ部類にははいりませんわい。あれ位のことは別に取立てて申す程のことではございますまい。ごらん下さいまし……私は長い旅をして參りましたので、この通り私の足のうらはすりむけてしまひました。とても、此上引返すわけには、まゐりません。どんな苦しいやしい仕事でも、よろこんで致しますから、どうぞ内へいれて下さいまし……。

ペートルス　ふふん、成程、何んでも致さうと云ふ心掛は感心だ。では、内にはいつて神樣のお歸りになるまで待つてゐるがいい。

（ペートルスは、少しばかり扉を開いて仕立屋をいれてやる。仕立屋はうれしそうにすべりこむ。）

ペートルス　お前は、そこに腰掛けてぢつとしてゐなければいけない。神樣は、若しお前がその邊をうろうろしてゐる處でもごらんになつたら、天國をけがす者として二度とこの門をくぐることの出來ない樣に、お前をほうり出してしまはれるにちがひないから。

仕立屋　はいはい、きつと靜かにしてお歸りをお待ち申して居ります。私は、もうすつかり疲れはてて居りますので……。

（ペートルスは、今まで自分の腰掛けてゐたそのイスを彼に與へる。）

ペートルス　では、わたしはこれからこの事を、花園にゐらつしやる神樣に申上げて來るから、しばらく待つてゐるがいい。

（ペートルスは、扉から出て左手に去る。仕立屋ひとりゐのこる。然しおちつかない樣子で、部屋の中を物珍らしそうにきよろきよろ見廻して。）

仕立屋　わしは、もう死ぬ前から天國はきつといい處にちがひないと考へては居つたが、こうして來て見ると、又何んと美しい心持のよい處だらう！　おや、あれが神

様のおすはりになる玉座だな。神様は、あそこにおすはりになつて、地上のあらゆる出來ごとをみんなごらんになつてゐるに、ちがひないのだ。どら、ひとつ、そばでよく拜見しようか。

（仕立屋は、その玉座の椅子におそるおそる近づき、そつと手でふれて見ながら。）

いいなあ！　此處にすはりさへすれば、世界中のありとあらゆる處、隅から裏まで見ることが出來るのだ！　そうだ、幸ひ神様はお留守なのだから、ほんのちよつと位わしがすはらせていたゞいたつて、いいだらう……。

（仕立屋は、その椅子の上にぼこんと腰をおろす。そうして、下界を見下す様な様子で。）

わあーつ！　不思議だなあ。何から何まですつかり見えるぞ。やあ、あそこで變な男が何かさがしまはつてゐるぞ。おや、あの家では主人も子供もみんなもう眠つてゐるのに、どうしたと云ふことだらう。そうだ、きつと盗人なんだな、あれは、あつ、主人の部屋にしのび足ではいつて行く……ようし、こらしめのために、そうだ、これでも投げつけてやらう……

（仕立屋は、夢中で側の臺の上の金の一輪挿しをとつて投げつける——この花瓶は、紙か何か輕いもので造つて、金色の繪具をぬつておけばよい。）

はつはつはつはつは……うまく頭にぶつかつたぞ！　天の罰だ！

（その時、門の處に聲がする。神様とペートルスが左手から連れだつて登場。神様は手に一輪の紅い花をもつて居られる。）

ペートルス　で、その足をいためました可哀そうな仕立屋は、この御門のうしろで、静かに待たせてございます。

神様　そうですか、それはよいことをしました。

（二人は扉をあけてはひる。仕立屋はおどろいて、イスからとびはなれて、頭を低く下げる。）

仕立屋　おお、神さま！　正直者の仕立屋は、この私でございます。

神様　ほほう、あなたが仕立屋さんですか、まあ、あのイスにおかけなさい。

（仕立屋、おづおづともとのイスに腰を掛ける。神様は手にもつた花をさそうと思つて、玉座の側の臺の

上の一輪挿しをさがすが、見あたらないので、ペートルスをふりかへつて、）

神様　はて、不思議なこともあるものです。ペートルスや、此處においてあつたいつもの私の花瓶を知りませんか？

ペートルス　（おどろいて）少しも存じませぬが……

神様　誰か、手にとつた者があると見えます。

ペートルス　でも、此處へは、この足をいためました仕立屋のほか、誰ひとりはいることは出來ませんでしたのに。

神様　（仕立屋に）　あなたは、私の大切な一輪挿しを御存知ありませんか？

仕立屋　おお、神さま、申しあげるのもお恥かしい次第ですが、實はこの私が、腹立ちまぎれに地上の盗人めがけて、ほうりましたのでございます。その盗人は、今にもその家の主人をいためつけやうと致しましたので……こらしめのために。

神様　そうでしたか。では、あなたは私の留守の間に、此のイスにも腰をおろされたのですね？　で、なければ……

仕立屋　（こまつて）　はい、仰せの通りでございます。どうぞ罪深い私を特別の御慈悲をもちまして、おゆるし下さいまし。

神様　こまつたことをしてくれましたね、あなたは。

ペートルス　（仕立屋に）　なぜ私の云付けを守つてくれなかつたのですか！　おお、私はどうしたらいいだらう！

神様　（仕立屋を喩す様に）　あなたが、その盗人をさばきした様に、私が若しさばきをするならば、あなたはもうとつくの昔に罰を受けてゐる筈です。そうして、私はこのイスも腰掛もテーブルも、それどころか、イロリの火箸までも、一つのこらず罪ある人々をめがけて投げ下し投げ下しして、此處にはとうの昔に何一つなくなつてゐる筈です。しかし、私のほかには何人もほんとに他人を罰する權利はないのです。他人を石うつ前に、その人は自分の心に問ふてみるがいいのです。あなたは自分で自

分を正しい者だと思つて居られる樣ですが、それは大變な間違ひです。あなたは天國にそのまま止まることの出來る方ではありません。此處は心の正しく聖い者ばかりの住む處です！

さあ、ペートルスや、この仕立屋さんを遠い旅に出すがよろしい。そうしてもつとありとあらゆる處を見せて、心が再び聖く正しくなる時まで、旅をさせるがよいでせう。

ペートルス　かしこまゐりました。さあ、恩知らずの仕立屋、わしが門の外まで送つてやらう。

仕立屋　（其處にひざまづいて、泣聲で）御慈悲です！　おお、神さま、特別のお惠みをおたれ下さいまし……

ペートルス　いや、一刻も早く旅立つがよい。お前が若しほんとうに心の底から正しく聖くなつた時には、再びこの門の扉をたたくがよい。その時には、神樣はきつとよろこんでお前を迎へて下さるにちがひありませんから。

仕立屋　どうか御慈悲で……この哀れな仕立屋を……お救ひ下さいまし……

（仕立屋は、ペートルスにひきづられる樣にして、門の外につれ出される。そうして、とぼとぼと左手に去る――天國の門の扉が、ぱたんと閉まるのを見て。神樣はその時、玉座に坐はつてぢつと考へ込んだまま、手にもつた紅い花の花ビラを、無心に一枚一枚ともぎとつて、床にちらしてゐる。）

幕

サンタ・クロース

スーロク・タンサ

景一

時・　クリスマスの晩

處・　クリスマス・ツリーのある一室

人・　一郎（四五年生）
　　花子（三四年生）
　　次郎（二三年生）
　　和子（一二年生）
　　三郎（五六歳位）
　　ポス（犬の名前）
　　サンタ・クロース

幕があくと、舞臺には誰もゐない。まん中にクリスマス・ツリーが一本立つてゐるきり。十時の時計の打つ音が聞える、靜かな音樂がひびいてゐる。やがて、右手より袋を肩にかつぎ、左の手にはクダモノのはひつた籠をもつたサンタ・クロース登場。肩や帽子にかかつた雪を拂ひおとしながら。

サンタ　やれやれ、ひどい雪だわい。どれひと休みしようか。

（そこに袋とカゴをおろして、ポケットから手帳を取出してめくつて見ながら）

ええと、たしかに此の家だつたな、一郎達の家は。そうぢや、五人の兄妹たち——一郎、花子、次郎、和子、三郎…と。それに、子供の仲間へおばあさんも入れておいた筈ぢや。もうとしとつて動けないが、いいおばあさんだからプレゼントをもつて來てやつたわい。はつはつはつはつは……。

（その時、左手よりポス——頭に犬の首をかむつた少年——が突然登場。サンタ・クロースを見付けて、吠える）

ポス　ワンワンワンワンワン……

サンタ　（おどろいて困つた樣子で）　これこれ、靜かにしないか……どうも、わしは犬は苦手ぢや、去年も犬のためにはひどい目に會はされたからな。全くこればかりにはこまつたものぢや。

ポス　ワンワンワンワンワン……

（サンタあはてて袋を肩にして逃げ出さうとした時、左手より一郎を先頭にして五人の兄妹がいそいで登場）

一郎　やあ、サンタのお爺さんだ！　みんな早く來てごらん。

花子　お爺さん、クリスマスお目出度う。

次郎　こら、ポスや靜かにするんだよ。お爺さんに吠えついてはいけないよ。

サンタ　（急にふりかへって笑ひながら）　やあ、まだみんなねなかつたのかい？

和子　ええ、今晩はみんなでお話して待つてゐたのよ。サンタのお爺さんの來るのを！

サンタ　それはそれは、御苦勞さまぢやつたの。では、もう見付かつちやつたから、此處で一人一人にプレゼントをおいて行くことにしようか。

一郎　うれしいなあ。

三郎　うれしいなあ。

サンタ　はつはつはつはつは……。みんな元氣で何よりぢやな。今年もみんないい子だつたから、プレゼントをうんともつて來てやつたぞ。

一郎　僕には、何にを下さるんですか？

サンタ　さよう、ちよつと待つてゐて下さいよ。（ポケットから又さつきの手帳を取出して調べて見ながら）　ええと、一郎さんには、アップルパイだよ。

一郎　僕の大好きなお菓子だ。

（サンタ、袋の中から紐でゆはへたお菓子箱を取出して）

サンタ　はい、一郎さん！

一郎　どうも有難う。（一寸と匂ひをかいで見て）　いい匂ひがするなあ！

花子　あたしには、何にかしら？　お人形かしら？

サンタ　ええと、それから花子さんには（手帳を見て）　さうだ、とびきり上等のチョコレ

ートだよ。

花子　チョコレート？　まあ、あたし毎日それを待つてゐた處なの。

（サンタ、袋から美しい箱を取出して）

サンタ　はい、花子さん！　あんまり澤山一度に食べないで下さいよ。

花子　あら、すばらしいこと！　お爺さんどうも有難うございます。

サンタ　はつはつはつは……

次郎　僕には、大きなおもちやがいいなあ。

サンタ　これこれ、そう慾張るもんぢやあない。どらどら調べてみよう、次郎さんに

はと…（手帳を見て）はつはつはつは……これはこれは、何んと丁度大きなおもちやに

なつてゐるぞ……

次郎　ほんとですか？　僕、うれしいなあ……早く見たいもんだ。

（サンタ、袋から鐵砲を取出して）

サンタ　これは、どうぢや！　氣に入つたかな。

次郎　わあーつ、鐵砲だ！　バンザーイ。さすがはサンタのお爺さんは偉いですね。

サンタ（それを渡しながら）　これこれ、そうほめてももうあとは出ないよ。はつはつは

つはつは……。

和子　あたしには、何んでせう？

サンタ　和子さんだつたねえ（手帳を見ながら）おや、フランス人形だよ。

和子　まあ、フランス人形を下さるの？

（サンタ、袋から取出して）

サンタ　ほうら、大切にして可愛がつてやつて下さいよ。

和子（こおどりしながら）　あら、何んてかあいいんでせう！　どうも有難うございまし

た。あたし、いつもだいててやるわ。

三郎　僕は何んだらうなあ。

サンタ　三郎さんはちひさいが、一番おりこうでよくみんなの云ふことを聞いてゐたから、ひとつ上等のプレゼントにしよう。何がいいだらうなあ。（考へついた樣に）そうだ、これこれ、これがよからう。

（袋から飛行機を取出して）

どうぢや、ひとりでとばせるかな？

三郎　（よろこんで）わあーつ、飛行機だ！

サンタ　はつはつはつは……うれしそうだな。やれやれ、これでみんなすんだかな？

ポス　ワンワンワンワン……

サンタ　やあ、まだポス君を忘れてゐたか、すつかり。そうだ、ポス君にはバタ入りのビスケットをあげよう。さあ、こちらへ來てごらん。

（袋から紙包みのビスケットを取出して、ポスの手にわたす）

ポス　（うれしそうに）ワンワンワン……

サンタ　よしよし、一度に澤山たべるとおなかをこはすから、少しづつ食べるんぢやよ。さて、おばあさんには、おいしいくだものを此處に持つて來てあげたから、一郎さん、あとでこれをおばあさんのお床にもつて行つてあげておくれ。

一郎　どうも有難うございます。おばあさまはどんなによろこぶことでせう！

サンタ　どれどれ、わしはまだこの袋の中のプレゼントを、みんなのお家へ配つてまはらなければならぬから、ぽつぽつ出かけるとしようか。

（その時、外で橇の鈴の音がする）

おや、トナカヒがどうやら待ちくたびれて呼んでゐるやうだ。（袋を肩にしよつて）では皆さんごきげんよう！　又、來年元氣でお會ひ致しませうね。

一郎　（名殘りおしそうに）どうも色々有難うございました。では、來年はもつとよい子になつて居りますから、きつと又來て下さいね。

サンタ　ああ、いいともいいとも。よい子の處には毎年來てあげるとも。

一同　サンタのお爺さん、さようなら。

サンタ　皆さん、ごきげんよう。

（右手に去る）

（一同そのまま見送りながら合唱）

わたしの好きな　サンタ爺
肩の袋も　重そうに
今年もようこそ　來て呉れた

クリスマスには　何よりも
サンタ爺やの　なつかしい
お顔が見たい　わたしたち

愛の心を　そだてよと
おくりものをば　おいて行く
神の使ひの　サンタ爺

又來年に　會ひませう
わたしの好きな　サンタ爺
ではさようなら　バイバイバイ

（一同第四節の最後に、手をふつてうたひをはる時に……）

幕

註・　この對話は全然幕がなくつて演出出來ます。

よろこびの星夜

夜星のびころよ

景　二

第一景

時・　最初のクリスマスの夕方頃
處・　ベツレヘムの近くの野原の木蔭
登場人物・　少年1（十四五才位）
　　同　2（同）
　　同　3（同）

ある木蔭。一人は中央の切株に腰をかけ一人はその有、一人はその左手にいづれも地面の上に腰をおろして話をしてゐる。彼等はもうさつきからここで各々の意見をたたかはせてゐるらしい。あたりはもうすぐらくなつてゐる。

少年1　救主の降誕は誰も疑ふ者はないはづだ！　僕はこの苦しめに苦しめぬかれてゐるユダヤ民族のために、あの憎いローマ兵士共を征服する強い救主の出られることを待ち望んでゐるのだ。

少年3　勿論、救主の降誕は預言者の言葉だから誰だつて疑やあしない。しかし、僕の望んでゐるのは、武力の王ではない。どこまでも、人間の心を支配される心の王様だ！

少年1　しかし、今やローマの勢力は飛ぶ鳥もおとす位だ。このローマを征服することは、そんなにたやすいことではないぞ！

少年3　だから尚更、劍の征服は好まないのだ。たとへそれが一度はその劍が折れ碎かれることがあつても、又いつかそれは知らないうちに磨かれて再び闘ふ時が來るものだから。

少年2　君達二人の考へてゐることは、結局同じことなんだ。つまり、どちらもしひたげられたこのユダヤ民族を、ローマの手から開放し、自由を與へて呉れる強い王様を望んでゐるのだ。どうしても、今、我々には誰か力のある偉いお方が必要なこ

とは事實なんだから。それは例へ武力の王でも心の王でもかまはないのだ。僕等はたゞこのユダヤ民族を少しでも現在の苦しみから救つて呉れる人でありさへすれば。

少年1　しかし、僕達の議論も結局は豫言が成就されればわかることなんだ。

少年2　そうだ、その豫言の成就ももう間近かにせまつてゐるのだ。

少年3　ああ、僕達はどんなにその日を待ちこがれてゐることだろう！

（その時、ふと少年1は立ちあがつて、左手を指さし、叫ぶ）

少年1　やあ、あそこにラクダが三頭並んで歩いて行くのが見える！

（一同立ちあがつてその方をみつめる）

少年2　何處へ行くのだらう！

少年3　みんな王様の様な身なりをしてゐるぞ。

少年1　しかし、お供が一人もゐない。

少年2　不思議だなあ！

少年3　みんな、この近くの人達ではないらしい。

少年2　遠くから旅をして來たのだ、きつと……。

少年1　ベツレヘムの街道を上つて行く。

少年3　みんな、あとをついて行つてみないか。

少年2　そうだ。

少年1　何事かあるにちがひない！

少年3　さあ、走つて行かう。

（一同左手にいそいで退場。）

幕

第二景

時・　その夜
處・　つゞきの野原
登場人物・　羊飼1・2・3・4・5
附近の乙女1・2・3
老人

靜かな音樂で幕が開く。
羊飼達は思ひ〳〵の樣子で野原に腰をおろしてゐる。あたりはすつかり暮れて、わづかに星あかりが白く、羊の群を照らしてゐる。

羊飼1　（空を仰ぎながら）　こんなに美しく星のかがやきわたつた靜かな晩は珍らしい！
羊飼3　羊達のからだも銀色に星の光りで光つてゐる。

羊飼2　わしたちがこうして、そばにゐてやれば羊達はほんとうに安心して眠ることが出來ると云ふものだ。それに今夜はまた何んと美しい光りが空にわたつてゐることだろう。
羊飼5　かがやかしい夜だ！
（その時一人の附近にすむ老人が長い杖をついて左手より登場、通りかかる）
羊飼4　おや、今頃おぢいさんどこへいらつしやるんだね？
老人　（ふと立ちどまつて一同に）　皆の衆、まあなんてえらいさわぎだろう、街の方は。
羊飼1　いつたい何のさわぎだね？
老人　まだ、みなさらないのか。
羊飼5　大方またローマ兵の亂暴か、稅金の催促でわしらの仲間が苦しめられでもしてゐるにちがひないだ。
羊飼4　今朝も、マリア婆さんの處では、ローマ兵のために、大切にしまつてゐた着

物も革袋もとられてしまつたのだ。

羊飼2　ぢや、また王様の新しい命令でも下つて、めつそうもないその法令にひとさわぎはじまつたのだろう。

老人　ちがふちがふ、あのベツレヘムに上る街道をみなされ。それはすばらしいさわぎだ。立派な幾頭もの象の背中に寶物を山ほどつんだ行列が上つて行つただよ。

羊飼5　象が？

羊飼3　何事だろう、いつたい？

老人　それにラクダも王様らしいお方をのせてあとから行くのをみたんだ。

羊飼4　はてな、するときつと街には何か變つたことがおこつてゐるにちがひないぞ。

老人　そうとも。こんなことはめつたにあることではない。

（その時、右手にあたつて少女の唄の聲が聞える。）

きよしこのよる　ほしはひかり
すくひの御子は　みははのむねに
ねむりたまふ　ゆめやすく

（一〇五番）

（一節終ると同時に登場。いづれも牛乳壺をもつてゐる）

少女1　おぢさん、大變よ、あそこの廐でそれはかはいい赤ちやんが生れたんですつて……。

老人　（おどろいて）ええ？　赤ちやんが？

少女2　隣りのおぢさんがそう云つてたわよ、それがどこか旅から來た通りがかりの人達らしいんですつて。

老人　おお神さま！　嬰兒を祝福し給へ！

少女3　男の赤ちやんですつて。
羊飼1　何に？　男の赤ちやん？
羊飼2　救主だ！　我等の待ち望んでゐた！
少女1　これからすぐ、この搾りたてのおちちをもつて行つてあげるのよ。
少女2　さあ、いそいで行きませう！

（左手に少女達退場。つづいて合唱遠くからひびく、次第に大きく）

もろびとこぞりて　むかへまつれ
ひさしくまちにし　主はきませり
主はきませり　主は主はきませり
くろがねのとびら　うちくだきて
とりこをはなてる　主はきませり

主はきませり　主は主はきませり

老人　おお、ではとうとう豫言が成就したんだ。
羊飼1　さうだ！　世界一の王様の御誕生だ！
羊飼5　我々ユダヤ民族も、いよいよローマの手から救はれるぞ！

（合唱次第に高くなる）

羊飼2　（左手を指し乍ら）　おや、あの大きな星は！
羊飼3　今迄少しも氣がつかなかつた。
羊飼4　きれいだなあ！
羊飼5　光りは廐の上にさしてゐる、そうして、屋根は金色にかがやいてゐるではないか。

（合唱つづく、その時、左手に、はつきりと天使の聲――姿はみえない）

天使の聲　おそるな、みよ、このたみ、一般に及ぶべき、大なるよろこびの音信を我なんじらに告ぐ、今日ダビデの町にて汝らのために救主うまれ給へり、これ主キリストなり。なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しをる嬰兒を見ん、是そのしるしなり。

羊飼1　天使の聲だ！

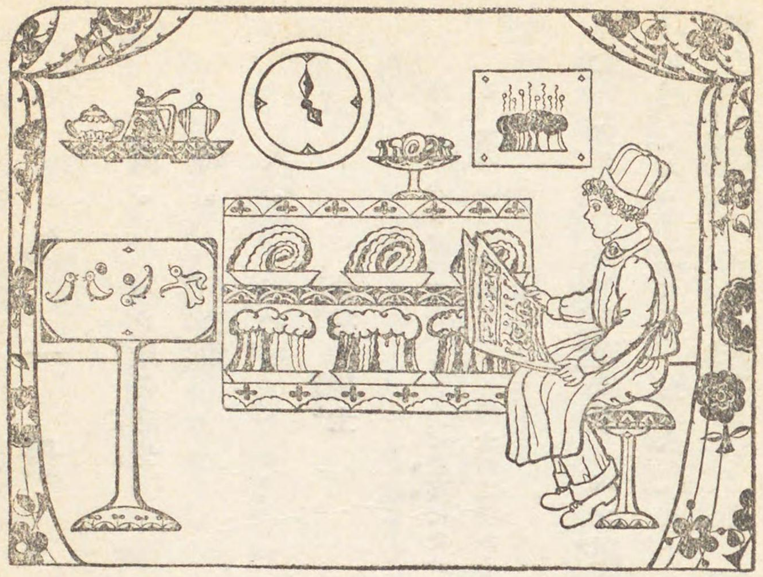
羊飼3　さあ、ベツレヘムに行かう！

羊飼2　厩の救主を拜みに！

（羊飼一同左手に退場。老人一人のこりて片手をあげ祈る）

（合唱いよいよ高くなる時……しづかに幕とす）

幕



心聖き者は幸福なり

心聖き者は幸福なり

二　景

第一景

處・　パン屋の店先
時・　夕方頃
人・　パン屋
　　金持の紳士

場面は、パン屋の店先ですぐ前は道路になつてゐる。パン屋が一人店先のイスに腰掛けて、新聞を見てゐる。幕があく。やがて一人の紳士が左手から登場。

紳士　（店先に立つて）今晩は！　パン屋さん！

パン屋　（ふとめを上げて）　おや、いらつしやいまし。

紳士　上等のパンを一斤下さい。よく燒けてゐる奴をね。

パン屋　はい、かしこまゐりました。

（奥の方からパンを一斤もつて來て）

旦那樣、これは燒きたてのほやほやでございますよ。

紳士　ほ、ほう。そいつは結構。

（パン屋は、パンを包みはじめる。）

處で、パン屋さん、ほかでもありませんがね、一つわしにたのまれてはくれませんか？

パン屋　旦那樣、何んでございますか、いつたい？　このわたしに出來ますことなら何んでもよろこんで致しませう。

紳士　（ポケットから金貨を三枚取出して）實は、わしはこの金を、この町中で一番正直な人にやり度いのだが……

パン屋　おや、左樣でございますか。それでそのお方のお名前は何んとおつしやるん

でございますか、旦那様？

紳士　いや、その人をつまりわしは、あんたに見つけて貰ひたいと思つてゐるんですよ。

パン屋（おどろいて）旦那様、いつたいこの私に、それがどうして出來るのですか？

紳士　それは、わけはないことですよ。先づこのお金をあんたがパンを燒く時に、ある一つの中に入れて燒くんです。で、そのお金のはひつた奴を、この人ならばお金をきつと返しに來るだらうと思ふお客に渡すんです。

パン屋　ですが旦那様、そんなことさなつて、お金はとても戻りつこはありませんぜこの節、それ程正直な人は澤山はゐませんからね。

紳士　いや、そんな筈はない。わしは今正直な人を一人ほしいと思つてゐるんだからそれに、わしはたしかに一人位はこの町にも、そうした人はゐると信じてゐますよ。人の噂によれば、正助とか云ふ人も、大變な正直者だと云ふことではないか。

パン屋（思ひついた様に手をうつて）成程、そうだ！　あの人なら自分のものでないお金には指一本だつてふれないでせうから……

紳士　そうですか、それぢやあ早速ためして下さい。このお金で。若し思つた通り返しに來たら、それをとつておく様に云つて下さい。そうして、若し私の處を訪ねて來れば、仕事と澤山の給料をやると申傳へて下さい。では、此處に私の名前と住所のかいてある名刺をおいて行きますから。

パン屋　かしこまゐりました。若しみつかりましたら、そう申しませう。

紳士　ぢやあ、おねがいします。さようなら。（パンのお金を差出す）

パン屋　どうも有難うございました。おやすみなさいまし。

（紳士は右手に去る）

パン屋（ひとり言の様に）さてさて、物好きな人もあるものだ！　今が今まで、こんなことを聞いたことがないわい。だが、正助さんは心の正しい人だから、きつと返し

に來るぜ。早速あしたためしてみよう！

（パン屋は、ハタキをとつて店先を掃除しはじめる。）

第二景

處・ 正助さんの家の居間

時・ その翌日の日ぐれ頃

人・ マリ雄（十二三才位）

マリ子（十才位）

正助さん（子供達のお父さん）

パン屋

幕

場面は、部屋の中央にきたない粗末なテーブルが一つあり、そのまはりには三脚のイスがある。今、マリ雄とマリ子はそのテーブルに向つて勉强してゐる。幕があく。七時の時計の音がひびく。

マリ雄　早く、お父さまが歸つてゐらつしやればいいがなあ、僕、すつかりおなかがすいちやつたよ。

マリ子　私もそうよ。今日はお父さまのお歸り、隨分おそいのねえ。何かお仕事がみつかつたのかしら。

マリ雄　ね、マリ子、お母さまがなくなられてから、とてもさびしいねえ。僕が働きに出られる位大きいといいんだがなあ。

マリ子　お父さまに、何かお仕事がありさへすれば、私達のためにうんと働いて下さるでせうに。

（その時、右手にあたつて靴の音。）

おや、お歸りになつたらしいわ。

（マリ子は右手の入口の方に走つて行き、お父さまを迎へる。お父さまは、手にパンの包みをもつてはひつて來る。）

お父さま、お歸なさい。

マリ雄　お父さま、お歸りなさい。

正助　やあ、おまちどうさま！　お前達、隨分おなかがすいたらうね。こんな仕事の見つからない、いやな時代が早くすんでくれればいいが。――と云つても、それが續く間は、出來るだけのことは矢張りしなければならない……

（お父さまもテーブルに向つて腰掛ける。そうして、お父さまはパンの包みをあける。マリ雄のぞきこんで）

マリ雄　やあ何んておいしそうなパンだろう！　いい匂ひだなあ！

正助（ひとりごとの樣に）これが、わしたちにとつては最後のパンだ！　今度はいつかへることか、わからない。

マリ子　お父さま、お仕事がみつかりましたの！

正助　いいや、なかつたよ。今時誰にだつて、新しい仕事口なんかなさそうだ。さあ夕飯を食べよう。

（お父さまは、そのパンを二つの大きい片と、一つの小さな片とにさく。そうして、小さいのを自分にとつて、大きいのを二つ子供達にやる。）

マリ雄（それを見て）おや、お父さま、これでは公平ではありませんよ。

正助（輕く）何にが公平でないんだね？

マリ雄　お父さまのばかり小さいんですもの。

マリ子　そうだわ、お父さまのよりづゝと大きいわよ、あたしのも。

正助　はつはつはつは……、それで文句を云つてるのか、いいよ、いいよ、だまつておたべ……

マリ子　でも、お父さまは一日中お仕事を探してゐらつしやつたんでせう。きつと、疲れてゐらつしやるにちがひありませんわ。それに、何もおたべにならなかつたん

でせう。

正助　お前達は、わしのことを心配してくれるんだね、感心だ。だが、わしは自分で食べるよりお前達が食べてゐるのを見てゐる方が、づつといいのだよ。

マリ雄　でも、お父さまが食べなければ、明日またどうして仕事をさがしにいらつしやることが出來ますか。又、若し仕事がみつかつた處で、どうして働くことが出來ますか、さあ、僕のパンをもつとたべて下さい。お願ひです。もう一度わけなほして下さい。

マリ子　あたしのも、そうしてちやうだい！

（二人、お父さまの前にパンを出す。）

正助　よしよし、お前達がそれほどまで云つて呉れるなら、お前達をよろこばすために、そうしよう。

（お父さまは、パンをとつて再び裂かうとする。その時、金貨がその中からテーブルの上におちる。一同おどろいて、それをみつめながら。）

マリ子　おや、大變よ、お金だわ！

マリ雄　やあ、ほんとの金貨だ、これは。不思議だなあ！

正助　これこれ、お前達、それにさはつてはいけないよ。そのお金は、私達のものではないからね。

マリ雄　では、お父さま、誰のものですか、いつたい？

正助　誰のだか、わしも知らないのだ。全く不思議なこともあるもんだなあ！　このパンの中から……　そうだ、私達は、きいてみなければならない、さあ、マリ雄、お前いそいでパン屋へ走つて行つて、そのことを聞いてごらん。

マリ子　でも、お父さま、私達はとても貧乏なんです。それに、そのパンはもうお父さまがお買ひになつたものぢやありませんか。

正助　それはそうだよ。しかし、そんなことは、私達が不正直でいいと云ふ理由には

ならないからねえ。

マリ雄　そうだ。お父さまのおつしやることが正しいのだ。僕は、いそいでパン屋さんにそのことを話して來ませう。

（マリ雄は右手にいそいで去る）

正助　（ひとりごとの樣に）　お前達がひもじい思ひをしてゐるのを見るのは、たしかにつらいことだ……けれど、お前達が不正なことをして榮えるのを見るのは、尙更つらいことだ。わしは、今迄も正直一本を守り通して來たのだ……どんなに苦しい時にでも……

マリ子　そうだわ、若しお母さまがゐらつしやつたら、きつとお母さまもそうおつしやるでせう。お前達はどんなことがあらうと、心を聖くもつてゐなければいけないつて。おや、お兄さまがもどつて來た樣だわ……

（その時、右手よりマリ雄を先にしてパン屋もついて、いそいではひつて來る。）

マリ雄　お父さま、來ましたよ、パン屋さんも。僕がお金のことをすつかり話しましたので。

パン屋　やあ、正助さん、圖星ですよ。やつぱり、私の思つてゐた通りだつた。

正助　いや、お前さん、何か大變な間違ひをしでかしてゐますよ。いつたい、これはお前さんのお金ぢやありませんか？　パンの中からころがり出るなんて。

パン屋　（にこにこしながら）　いや、それはたしかに私のぢやありません。私は、あの人にそう云つたんです。たしかに、正助さんこそその人だつて。

正助　ええ？　何を誰におつしやつたんです？

パン屋　いえ、あのお方ですよ。つまりあのお方は、私の店にゐらして、この町で一番正直者はあなただと、おつしやつたんです。私も、そうだと思つて、やつてみたのです。

正助　いつたい、何のことですか、それは？　まるで、わしはキツネにつままれてゐ

る様だ！

パン屋　そうだ、ことの起りをお話ししなければ――實は、昨日一人の紳士がこのお金をもつて、私の店に來られたのです。そうして、このお金をパンの中に入れて燒いて、それをお前の知つてゐる一番正直な男にやつてくれ、その人が若しお金を返しにやつて來たら、その正直の報ひにそのままお金をやつてくれ、とおつしやいました。そこで、私は、そのお金のはいつたパンをあなたにあげたのでした。まんまと私の圖星はあたりました。そのお金はたしかにあなたが貰ふべきものなんです。

どうぞお取り下さい。

マリ子　まあ、お父さま！　きつと、神さまが私達を助けて下さつたのですわ。

パン屋　その上、そのお方はこう申されました。正直な人が見つかつたら、その人を私の處へよこしてくれ、そうしたらわしは仕事と澤山の給料をその人にやりませう、とこの名刺をおいて行かれました。あなたこそ、その幸福な人なんです。

正助　何に？　仕事！　その上いい給料ですつて？　そいつあこのお金より結構だ。有難う、ほんとに有難う！　お前達、わしたちは早速この親切なお方の處へ行つてみよう。夕飯なんかあとでもいい。おお神様、私達を正直にさせておいて下さいまして、有難うございます。きつと、私達はぢきに思ふ存分なパンもいただけることでございませう！　親切なパン屋さん、御恩は一生忘れませんよ。はつはつはつは……

パン屋　では、これから早速、あのお方を訪ねてごらんなさいまし、きつと、幸福をお與へ下さることでせう。

正助　有難う！　では、すぐに出かけよう！

（一同、右手に朗かに退場する時……）

幕

註・　この劇の道具立は、皆ボール紙に描いたものでよろしい。ごく簡單な組立てで行ふ方がかへつて面

白い。パンを入れたガラス箱も、一枚のボール紙に描けばいいし、其他のものもこうした方法をとるのがよい。第二景は、たゞ、テーブルと三脚のイスだけで、他には別に强ひて用ひなくともすむ。金貨は銅貨に金紙を貼つたもので間に合ふから、第二景に用ふる時は、あらかじめパンの中に入れ、それぞれ適當にすぐ裂くことの出來る樣に切目をつけておいていたゞき度い。

金の斧銀の斧

金の斧銀の斧

一幕

處・　森の中の小川のほとり

時・　いつでもよい

人・　樵夫（正直な人）

小川の精（美しい女神）

場面は、森の中で、正面に左手から右手にかけて、小川が流れてゐる樣子をあらはすために、二尺位の草が（ボール紙に描いたものでよい）づつとふちに生えてゐる。そのかげに、小川の精がかくれてゐるのである。

幕が開くと、舞臺には誰もゐない。

間もなく、一人の貧しい樵夫がきたない斧をかついで、左手より登場。あたりの木を見まはす樣な樣子をして。

樵夫　はて、今日はどの木にしようかな。そうだ、あれは眞直ぐだし、大分太くなつたからいい柱になりそうだ。ひとつ、あれを切り倒してやらう。

（右手にある一本の木のそばに行き斧をふるつて切りはじめる。しかし、二三度うつてみてやめる。そして、ひとりごとの樣に）

これは大分かたい木だ。こんな切れない斧では駄目だ。それにしても、早くあの町で見て來たぴかぴか光つた斧が買ひ度いなあ。然し、それには、高いお金がかかるし、とても今すぐには買へそうもない。

（思ひなほした樣に）

仕方がない。まあ出來るだけやつてみよう。

（又、うちはじめる。五六度うつ。その時、木を打ちそこねて、手にもつた斧が小川の中にとびこんでしまふ。樵夫おどろいて、小川のふちにかけより中をのぞき込みながら）

やれやれ、とんだことをしてしまつたわい。あんまり力を入れすぎたので、小川の中へぽうり込んでしまつた。深いからわし一人の手ではどうにもならない。斧がなければ、わしは一日も仕事が出來なくなつてしまふのだ。はて、こまつたことになつてしまつたなあ！

（そこへ腰をおろして、腕をくみ考へこむ。その時、左手にあたり、小川の精がそっと草のかげから姿をあらはす）

精　（やさしく）　あなたはそこで、何を考へこんでゐらつしやるのですか？　何か心配ごとでもおこつたのですか。

樵夫　（おどろいて立上り）　おや、あなたは、ついぞこのあたりで見かけたこともないお方だが、いつたいどなたですか？

精　私は、この小川の精です。

樵夫　ええつ？　小川の精ですつて？

精　そうです。私は、この小川を支配してゐる者です。早くあなたの心配ごとを話してごらんなさい。私の力で出來ることならば、何んでもお助けいたしませう。

樵夫　實は、私はいま、ふとしたはづみに大切な私の斧を、この小川の中へ落してしまつたのです。あの斧がないと、私は一日も暮しては行けないのです。

精　まあ、それはお氣の毒ですね。樵夫さんに斧は、生命から二番目に大切なものですから、さぞおこまりでせう。では、私がさがして來てあげますから、ちよつと待つてゐて下さい。

（精は姿をかくす）

樵夫　（ひとりごとの樣に）　ああ、何んて親切な方だらう。それにしても、うまく見つかつてくれればいいがなあ。何しろ、深い水の中のことだから。

（再び、もとの處に精は姿をあらはす。手には銀の斧をもつてゐる。）

精　（その斧を示して）　樵夫さん、この斧でせう。あなたの失くしたとおつしやるのは。

樵夫　（おどろいて）　それは、まあ、銀の斧ではありませんか！　とんでもない。わたしのはたゞのきたない錆びた鐵の斧ですよ。

精　まあ、きたない鐵の斧ですつて？　では、もう一度さがして參りませう。

（再び姿をかくす）

樵夫　銀の斧なんて、まだ生れてこのかた見たこともない大したしろものだ。しかしそれにくらべると、わしのは何んてきたならしい斧だらう。早くあのぴかぴかしたやつを買ひたいなあ。

（精、その時姿をあらはす。今度は手に金の斧をもつてゐる。）

精　（それを示しながら）　樵夫さん、これともちがひますね？　どうもそれらしい斧がみあたりませんけれど。

樵夫　ええつ？　それはまた金の斧ではありませんか。私のはたゞの鐵の斧ですよ。それも、もう錆びた切れない。

精　そうでしたね。では、もう一度よくさがしてみませう。

（精、又姿をかくす）

樵夫　ああ、おどろいた。金の斧なんてとんでもない話だ。わしは、目がくらんでしまつた。（目をこすりながら）　王様ででもなければ、とてもあんな斧は手にいれることは出來ない。しかし、あの銀や金の斧を一生のうちに一度でもいいから、この手にもつてみたいもんだなあ。

（精、今度は樵夫の持つてゐた斧をもつて姿をあらはす。）

精　樵夫さん、では、このさびた斧があなたのですか？

樵夫　（それを見て、うれしそうにかけよつて）　ああ、そうです。たしかに、これこそ私の斧です。ああ、よかつた。おかげさまで、ほんとに命拾ひをした様な氣持がいたしますよ。

精　まあ、あなたはこんな斧で木を切つてゐらしたのですか？

樵夫　そうです。私には、これがたつたひとつあるばかりです。ですから、何より大切にしてゐるのです。

精　正直者でよく働くあなたには、そんな斧では全くお氣の毒です。あなたがお金を儲けて、もつと色々のほしいものを買へる様に、此處にある斧をみんなさしあげま

せう。この銀と金の斧は、きつとあなたを幸福にすることが出來るでせう。

樵夫　まあ、それはもつたいないことです。私の樣な者には、この鐵の斧が丁度相當なんです。

精　これは、正直なあなたへ神さまが下さつたものです。どうか、使つて下さい。そうして、もつともつと働いて幸福になつて下さい。

樵夫　ほんとに、もつたいないことです。しかし、私はもう前から、あの町で見て來たよく切れる斧を一つほしいほしいと思つてゐた處です。でも、貧乏な私には、どうしてもそれが買へそうもないのです。

精　私は、何もかもよく知つて居ります。實は、あなたがさつき此處で、ひとりごとを云つてゐらつしやつたのを、全部聞いて居つたのです。可哀そうなあなたを、どうかして、助けてあげたいと思つて、實はわざわざ出て來たのです。さあ、早くこれをもつて、お歸りなさい。

樵夫　ああ、そうでしたか。私は、ちつとも知りませんでした。では、よろこんでいただくことに致しませう。

（樵夫は精の手から二つの斧を受取つて）

これをもつて、家へ歸つたら、さぞみんなおどろくことでせう。そうして、私はみんなに、この出來ごとを話しませう。

精　皆さんを、よろこばせてあげて下さい。銀の斧は、どんな大きな木でも、ひとうちでみんな切りたほされてしまひます。そうして、金の斧は、石や岩をさへうちわることが出來ませう。

樵夫　有難うございます。必ずわたしは今迄よりも一層働きます。そうして、少しでもお金が出來たら、困つてゐる人達をも救つてあげませう。

精　私も、それを聞いてどんなにうれしいことでせう。正直者のあなたを神さまはきつと守つて下さるでせう。では、さようなら！

（精、姿を消す。）

樵夫　おや、もうあなたは行つてしまふのですか！　私は、何んてお禮を云つたらいいか、わからないうちに。

（樵夫、小川のふちにかけより、水の面を見つめる。そして、ひとりごとの樣に。）

ああ、何んて不思議なこともあるもんだ！　わしは、全く夢の樣な氣がする。

（二つの斧を再びよくみかへしながら）

これは、ほんとの金の斧、これは又ぴかぴか美しく光つた銀の斧だ！　そうだ、早く家にもつて歸つて、みんなをおどろかせてやらう！

（樵夫、三つの斧を肩にかついで、いそいそと左手に退場。）

幕

カンタベリイの羊飼

カンタベリイの羊飼

三場

第一場

處・　王様の玉座のある部屋
時・　その日の午前
人・　僧正
　　王様
　　――其他王様の侍者數人

場面は、中央に王様が腰掛けて居り、その左右に數人の侍者が居る。幕が開くと、左手より僧正がおもむろにはひつて來て、王様の前にひざまづいてお辭儀をする。

僧正　おお、王様！　お召しでございますか。

王様　僧正よ、これはまたどうしたことか。噂によれば、お前はわしよりも遙かに立派な家に住まつてゐると云ふではないか。どうして、お前はその様なことをしたのぢや！　この國の者は、誰でもこのわしより立派な生活をしてはならぬと云ふことを知らぬのか。

僧正　でも、王様、恐れながら私は自分のもの以外には、何も使つては居りませぬ。

王様　では、わしはあらためてお前に云はう。誰も此の國では、わしより立派な生活をしてはならぬと。

僧正　おお、王様よ、私が自分で物事を愉快に致さうとして居りますのを、惡くおとりになりませぬ様お願ひ致します。

王様　わしがそれを惡くとると申すのか。いや、惡くとらないでどうしよう。この廣い世の中にあるものはすべて、わしのものぢや。それなのに、お前はなぜわしよりもよい生活をして、わしをはづかしめやうとするのか。お前はわしに代つて王とならうとしてゐるのにちがひない。

僧正　おお、どうか左様におつしやりますな。その様なことは考へも致さぬことでございます。

王様　いや、もう何も申すな。お前の罪はあきらかぢや。すぐに首をはねるか、重い鎖で牢につなぐべきぢやが、わづかの時間を與へるによつて、わしの問に答へるがよい。若しお前がわしの三つの問に答へられぬ時は、お前の首ははねてしまひ、お前の金はすべてわしのものとしてしまふであらう。

僧正　王様よ、最早此の上は、どんな御命令にでも從ふより他はございませぬ。

王様　では、先づきかう。わしが黄金の冠を戴いて此處にすはつて居るが、お前はわしがどれ程この先長生きをするか、一日以内に申さねばならぬ。第二は、世界を馬でひとまはり致すには、どれ程の日かづがいるかを答へるのぢや。最後に、わしがどんなことを考へてゐるかを、はつきり云はねばならぬだらう。

僧正　おお、王様、それは非常にむつかしい問題でございます。只今即座にはお答へ致しかねます。しかし、あと三日間のおひまをいたゞきますれば、必ず全力をつくして考へて參ることでございませう。

王様　では、特に三日間のひまを與へてやらう、その上で若しお前が答へることが出來ない時は、お前の首を必ずはね、お前の金も領地もわしのものにしてしまふぞ。さあ行け、そして三日のうちに必ず戻つて來るがよい。

僧正　はい、きつと御命令通り致しませう。では、王様、しばらくお待ち下さいまし……。

（僧正は再びお辭儀をして、去る時に……）

幕

第二場

處・　途上にて
時・　それから間もなく
人・　僧正
　　羊飼

場面は、木立のある徑。左手より悲しそうに首垂れながら僧正が歩いて來る。間もなく右手より、羊飼が元氣に登場。僧正を見て。

羊飼　これはこれは、ようこそ御主人様！　お歸りの途中でございますか、處で、王様から何か、よいおしらせでも私共の處にございましたでせうか？

僧正（元氣なく）　私の忠實な羊飼よ！　それどころではない、悲しいしらせだ。私は

最早三日しか生きては居られないのだ……。

羊飼　まあ、それはまたどう云ふわけでございますか。

僧正　王様は、この私をお怒りなされて居られるのだ。そうして、私が、王様の三つの質問に答へることが出來ない時には、即座に私の首をはねてしまふと仰せられるのだ。それに、この様なことは人間には到底答へることの出來ない難問なのだから。

羊飼　御主人様、そのむづかしいお尋ねと申しますのは、どんなことでございませうか？

僧正　それは、ほかでもない。第一は王様がどの位長く生きられるかを、告げねばならぬ。次に、世界を馬でひとまはりするには、どれ程の日かづがかかるかを。それから最後に、王様が何を考へて居られるかを申上げねばならぬのだ！

羊飼　御主人様、御安心下さいまし。昔話に、馬鹿者が賢者に智慧をかしたと云ふことを、御存知ございませんか。きつと、この私が、御主人様をそのお難儀から、お

救ひ出來るやうに致しませう。

僧正　（おどろいて）　お前が私を助けられると申すのか！　羊飼よ、それは又どうしてするつもりなのか？

羊飼　御主人様、それにはよいことがございます。恐れながら人々は私が御主人様にどこか似て居る、と申して居ります。それ故、私が御主人様のお召物を着ましたなら、きつとわけなく御主人様と見違へられることでございませう。ですから、私めにあなた様の上衣と冠と指環と數人の召徒とをお借し下さいませ。そうすれば、私は早速王様にお目通り致し、たとひ外に何が出來ないに致しましても、御主人様のお身代りに死ぬことが出來ませうから。

僧正　親切な羊飼よ！　なるほど私はお前にその計劃をやらせて見たい。だが、萬一お前が失敗した時、私はお前を自分の身代りに死なせたくはない。その時は、私は自から死にませう。そうして、殘酷な王様からお前を救ひませう！

羊飼　御心配下さいますな。私達は、必ず死には致しますまい。私は早速出かけることに致しませう。さあ急いで私を僧正さまにして下さいませ。

僧正　では、早速そうしませう。

（二人は、いそいで右手に去る時……）

幕

第三場

處・　第一場と同じ

時・　その日の夕方近く

人・　羊飼（僧正の姿になつてゐる）

王様

——其他王様の侍者數人

場面は、第一場と同じ。幕が開くと、左手より僧正の姿になつた羊飼がはひつて來て、王様の前にひざまづいてお辭儀をする。

羊飼　おゝ、王様！　お約束通り戻つて參りました。

王様　よく來た、僧正よ、かくも早く戻つて參つたのは上出來ぢや。さあ、早く答へをきかしてくれ。答への用意は出來て居るぢやらうな？　若しそうでなければ、お前の首はなくなるのぢや。

羊飼　王様、恐れながら私の力の限りをつくして、お答へ申さうと致して居ります。

王様　そうか、それはよい。では、先づ最初の問に答へてみるがいゝ。わしはどの位長生きをするぢやらうかを。どうぢや、お前はわしにその死ぬ日までを、はつきり申さねばならぬのぢや。

羊飼　王様、恐れながらあなた様は、あなた様のおかくれあそばす日まで必ず御存命になりませう。そうして、それ以上は一日たりともこの世に、生きてはおいでになりますまい。

王様　ほ、ほう！

羊飼　また、あなた様は、その最後の呼吸をおひきとりなさる時に、必ずおなくなりになりませう。それより一分たりとも早くはございますまい。

王様　成程！　お前は仲々機智のある奴ぢや。それでは、世界を馬でひとまはり致すには、どれ程の日かづを要するか申して見よ。

羊飼　それは、あなた様が太陽と共に起き、翌朝再び太陽の昇りますまで、馬の背におのりになつてゐなければなりませぬ。左様になさりますれば、あなた様は疑ひもなく二十四時間で世界を、ひとまはりされたことにお氣がつかれることでございませう。

王様　ほ、ほう！　答はそれだけか。いやわしはそんなにわけなく片付けられやうとは思はなかつたぞ。では、今度こそ、わしの第三の質問ぢや。必ずお前にはこれも

答へられやう。わしは、いま本當に何を思つて居るか云つてみるがいゝ。

羊飼　はい、恐れながら申上げます、私はきつとその返事で、王様の御氣嫌をうるはしくおさせ致しませう。いま、あなた様は私がカンタベリイの眞の僧正だと、思つていらつしやるにちがひありませぬ。ですが――（その時、羊飼は僧正の衣と冠をぬぎすてて）――私は御覽になられます様に、實は……

王様　（おどろいて見入りながら）　おや、これはどうしたことぢや。お前は……

羊飼　御主人の僧正さま並に私のために、お許しをお願ひに參りました貧しい羊飼にすぎないのでございます！

王様　はつはつはつはつ……これはこれは、わしはまんまとはかられたわい！それにしても、お前は全く面白い奴ぢや。わしは、お前が氣に入つた。お前を主人の代りに早速、カンタベリイの僧正にしてやらう！

羊飼　王様、それはとんでもないことでございます。それは駄目でございます。この貧しい羊飼は、字を讀むことも書くことも出來ないのでございますから。

王様　成程、そうだつたか。それにしても機智に富んだ面白い羊飼よ、お前にわしはその代り何か與へることにしよう。そうぢや、わしはお前の生きてゐるかぎり、毎週お前に銀貨四枚づゝをやることゝしよう。そして、家に戻つたなら主人の僧正にお前が王様からお許しをもつて來たと申してやるがよい。

羊飼　おゝ、王様、それこそこの上ない喜びでございます。では早速これから戻りまして、慈悲深き王様のお許しを御主人様にお傳へ致しませう。

（羊飼お辭儀をして、うれしげに左手に退場する時……）

幕

一つの靴

一幕

處・　ある森の中
時・　クリスマスの晩
人・　熊
　　兎
　　狼
　　猿
　　鹿
　　羊
　　梟
　　サンタ・クロース

場面は、森の中で夜の感じである。
熊、兎、狼、猿、鹿、羊などが、一つの大きな靴を眞中において、そのまはりに半圓を描いて坐つてゐる。議論の最中にて幕があく。

熊　（靴を指して）　さて、羊君はこれを何んと思ふかね！
羊　どうも、とんと見當がつきません。さつきから考へてゐるんですが。
熊　では、兎君は？
兎　わたしは、大男の手袋ぢやあないかと思ふんですが。
熊　成程、それも珍案だね。
狼　我輩は、何か小動物の寢床だと推察するよ。
熊　さうさ、ネズミ族あたりの寢床なら、わけはわかるね。しかし、彼等はこんなしやれた家は持つてはゐまい。
鹿　私は、よく水を呑みに河に下つて行きますが、あの水の上には時々人間達が、こんな形をしたフネとか云ふものをうかべて、それに乘つてまるで泳いでゐる樣に、

水の上をわたつて行くのを見ることがあります。若しかすると、そのフネの一種ではないでせうか。

熊　成程、それもたしかに妙案だ。物識りの猿君の意見はどうだね？

猿　（頭をかきながら）僕は、帽子だと思ひます。

（一同、笑ふ。）

熊　我々の森に、こうした得體の知れない物が、天からふつて來たとは、全く不思議だ。誰か、ほんとに知つてる者はないのかな！

（その時、左手より梟の鳴聲が聞える。）

梟　ホー、ホー、ホー、ホー。

熊　やあ、梟が向ふからやつて來た樣だ。

（左手より、杖をつき眼鏡をかけた梟が登場。あたりをきよろきよろ見廻しながら。）

梟　ホー、ホー、ホー。

熊　梟君！　ちよつと。

梟　（立止つて）　おや、皆さん、今晩は！　みなさんおそろひで何んですかね？

熊　いや、實は大變なことが起つたんですよ。一つ物識りのあなたに、考へていただき度いと思つてゐる處なんです。

梟　いつたい、何事ですか、それは？

熊　と云ふのは他でもありません、これですよ。

（熊は、靴を指して云ふ。梟は、そばによつてよく見る。）

梟　（急に）はつはつはつは……、何んだ、ボロ靴ですか、これは！

狼　ボロ靴つて、何んのことですか？

梟　おやおや、ボロ靴を知らないんですか、これは、人間共の足にはく、クツと云ふ珍妙な袋ですよ。私はよく、村里に出て、時々人間共のこの足音にびつくりさせられるので、よく知つてゐるんです。全く、こいつは妙な物を拾ひましたね。

熊　いや、いつの間にかこの森に天からおつこちて來てゐたんですよ。それを、この猿君が私の處にもつて來たのです。

梟　成程！　それはそれは、大した拾ひ物でしたね。

兎　すると、これは人間達の足にくつゝけてゐるものですね？

梟　そうです。外に出る時兩足にはひて歩くものですよ。なああに、大した物ぢやありませんよ。

鹿　そうですか。私はまたフネの一種かと思ひましたよ。

兎　私は、大男の手袋だと思ひましたよ。

猿　僕は、帽子だと思つてゐましたよ。

梟　はつはつはつは……それはそれはみんな大間違ひ……たつた一つのボロ靴ですよ誰か旅の人でも通りかゝつて、きつとすてゝ行つたのでせう。さあて、今夜はいゝ星の晩だから、久しぶりに向ふの里に出て、ひとうたひやつて來ようか。では、皆さんさようなら。

熊　やあ、どうも有難う！　では、いつていらつしやい。

（梟は、右手に鳴き乍ら、とぼとぼと去る）

熊　さて、皆さん、このクツとか云ふ代物を、いつたいだう處分したらいいだらうか名案はないかな？　我々森の國では、こうした人間共の用ふる品物は、誰にも必要がないのだから。

猿　僕は、それを木の枝につるさげて、ユリカゴにしたらいゝと思ひますが。

兎　それは、大變いゝことですね。

鹿　私は、水入れにしたらよいと思ひます。

熊　成程、それもいゝ。まだ、ほかに？

狼　我輩は、そんなものはネズミ族に寄附して、彼等の家にしてやるべきだと思ふ。

羊　慈善的精神にとんだ。よい思ひつきだと存じます。大いに賛成です。

熊　それも仲々よいことだ。しかし、こう意見がまちまちでは、卽決はむづかしくなる。

（その時、右手よりサンタ・クロースの歌ふ聲が聞えて來る。）

もろびとこぞりて　むかへまつれ
ひさしくまちにし　主は來ませり
主は來ませり主は　主は來ませり

（袋をかついだサンタ・クロースが元氣に登場。一同サンタの方をふりかへって。）

一同　やあ、サンタのお爺さんだ！

サンタ　おやおや、みなさんおそろひですね。今晩は！　又一年ぶりでみなさんの元氣のお顏を見て、安心しましたよ。はつはつはつは……。

熊　去年も丁度此處でお會ひ致しましたねえ！　では、今日はクリスマスなんですね。

サンタ　そうですとも、わしは、これから次の町に行く處ですよ。相變らずこの袋をしよつてね。

熊　そうでしたか、すつかり忘れてゐました、早いものですねえ。處で、サンタのお爺さん、一つ知慧をかして下さいませんか？

サンタ　いゝとも、何んぢやね、いつたい？

熊　實は、この一つのクツについての問題ですが、これをどうしたら一番いゝか、今皆で相談してゐた處なんです。

サンタ　ほ、ほう！　靴！　それはめづらしいものを手に入れたもんだ、どれどれ、わしにみせてごらん。

（サンタは手にとつてよく見る。）

成程、間違ひなくほんものゝ革靴だ！

熊　それを、どう使ふのが一番いゝでせうね？　いつたい。

サンタ　これか？　これは元來人間達の使ふもんで、お前達には用のないもんだよ。

狼　全く、その通りですよ。

サンタ　うむ、まだはけばはける代物ぢや。よろしい、一つわしがきめてやらう。今夜わしは一軒々々町中の家をまはるからな、貧乏で靴の買へない人に贈物にしてやらう！　片方だけでも、その片方が破れて困つてゐる人にやれば、よろこぶだらうから、どうぢやな？

熊　それは、い、考へだ。そうすれば、喧嘩にもならなくつて、我々も一番い、。ぢやあ、皆さん、サンタのお爺さんにおまかせすることにしよう。

一同　賛成！　賛成！

サンタ　これで、皆さんも今夜は一つい、ことをすることが出來たと云ふものぢや。では、たしかにおあづかりして行きますよ……。

（サンタはその靴を袋の中に入れる。）

どうれ、いそぎますから、では又歸りに今晩の様子を皆さんにお話し致しませう。ぢやあ、いつて來ますよ。

一同　いつていらつしやい。

（サンタは袋をしよつて、左手に退場。）

熊　皆さん、難問題のクツの一件も目出度く解決出來たし、今夜はクリスマスでお目出度い晩だ！　さあ、星の光りをあびながら、ひとつ唄をうたつてみんなで踊らう。

一同　そうしよう、それがい、。

（一同、圓く手をつなぎ合つて、うたひながら踊りはじめる時……）

幕

註・　この對話は勿論幕がなくても出來ます。猿が靴をもつてそのあとから一同が登場すればよいし、最後には踊りながら一同退場すればいいのです。

出る人はみんな、頭にボール紙でそれぞれの動物の顔をかいた冠をつければ結構です。熊は必ず少し大き

い男の子、又全部男子ばかりで都合の悪い時は、兎、鹿、羊などを女子にすればよろしい。背景は森の中の木立を描いたものをつくればこれに越したことはないが、背景を用ひなくても別に差支へはありません三四年程度の少年達に適當な對話です。

お留守番をした羊飼

お留守番をした羊飼

二景

第一景

時・　最初のクリスマスの夜
處・　ベツレヘムの近くの野原
人・　プロローグ朗讀者
　　少年（十二三歲位）
　　少女（同前）

幕の開く前に、プロローグ朗讀者は舞臺の幕の前に出て靜かに朗讀をはじめる。

（プロローグの臺詞）

イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、それは、預言者によりてかゝれてありし豫言の成就せんためなりき。

「ユダヤの地ベツレヘムよ
汝はユダの長等の中にて
いと小さき者にあらず
汝のうちより一人の君いでゝ
わが民イスラエルを牧せん」

しかして、神よりイエスの此世に生れ給ひししるしとして、輝ける一つの星、空に高くかゞやきたり。そはかつて何人も見ざりしものなりき。その時、三人の博士來りそれは東の王、南の王、北の王なり。彼等空の星を見たれば、それにみちびかれ、遂にその母マリアと共に、いやしき馬槽に伏す聖き嬰兒のもとに至る。彼等、人々の拜せんために彼のもとにひれふすを見たれば、イエスに黃金、乳香、沒藥などさゝげたり。

小さき町ベツレヘムの近くの野に、夜、その群を守る三人の羊飼ありしが、彼等も

亦空に不思議なる星をみて、杖をとりて星にしたがひ行きしが、遂に臥したるイエスに訪ねあふ。彼等イエスの前に來りたる時、彼等のもとにひざまづき、拜し併して感謝をささげたり。彼等は貧しきがために、黄金寶石などもたざりしが、祝福と喜びにみちたる心をさゝげたり。そは永遠につきることなきものなれば、この世に於けるすべての寶よりも尊きものなり。

さて、羊飼等、彼等をベツレヘムにみちびきし星にしたがはんとせし時、彼等の群を幼き羊飼に見守らせたれば、彼は彼等と共に行かざりき。しかして、彼等歸り來りたる時、彼は、イエスの生れ給ひしその夜、主のもとに彼らひざまづきたる頃におこりしすべてのことを皆の者に告げたり。これは少年羊飼の物語なり。

（朗讀者退場と共に會場の照明暗くなる。後方の幕しづかにあく。背景はベツレヘムの町の近く。夜の野原。中央に大きな岩。少年は右手からはひつて來る。彼は毛皮のチョッキ、脚は膝から下はあらはに出して履物ははひていない。杖をもつてゐる。彼はうしろをふりかへりながら、手をふり呼びかはし乍ら登場）

少年　さようなら！　さようなら！　心配しなくても大丈夫ですよ、僕が羊達をよく氣をつけてゐてあげますから！

（彼は岩の處まで來て、ふつてゐた手をおろす。あたりはしづか。彼は岩にもたれて坐る。ひとりごとの樣に）

少年　實は僕も行きたいんだ！　あの人達と一緒に行きたくつてたまらないのだ！

（その時少女左手からそっと登場。少女も脚はあらはに、上衣は黑。しばらく少年をみつめてゐるが、やがて少年に近づいて肩をたたく、少年おどろいてふりむく）

少女　どうなさいましたの？

少年　なんでもないんです……ほんとになんでもないんですよ。

少女　でも、どうかなさいましたにちがひありませんわ！　泣いてゐらしたんでしょ？

少年　泣いてなんかゐませんよ……僕、わらつてゐたんです。

少女　どうして笑つてゐらつしやいましたの？　私も笑ひたいわ。

少年　たしかに笑つてゐたんですよ、なぜつて…（立上り一寸躊躇して）でも僕とてもうれしかつたんですよ。（彼は多少ほこらし氣に）あなたもごらんになつたでしよ？　ほかの羊飼達はみんなあの星にしたがつて出かけて行つたのを。そして、みんなは僕に羊の群をまかせてさ。僕、だから責任があるんですよ、すべての群に對してね。僕はこゝにゐてよく氣をつけて見守つてゐなければなりません。狼やなんかが出て來て羊をころさないやうにね。

少女　（おそろしそうに一寸少年の方に近づき）　まあ！　この邊に狼が居りますの？

少年　さあ、僕はまだ一度も見たことはないんですよ。ほかの人も誰もまだ見たことはないらしいですね。しかし、たしかに狼はゐますよ、だから群を守るにはとても責任が重いんです。

少女　どうして他の羊飼達は、みんな出かけて行つちやつたんですの、あなたにみんなまかせておいて。いつたいどんなことがあつたんでせう？

少年　あの人達は行かなければならなかつたんです。星に從はなければならなかつたんです。

少女　星ですつて？　どんなお星さまなの？

少年　（空を指す二人同時に空を仰ぐ）　ほらあの一番大きなかがやく星です。

少女　まあ！　なんてきれいなお星さま！　大きな大きなダイヤモンドの様ですわ！

少年　あの星は毎夜の様に大きくなつて行くのです！　キラ〳〵とかゞやきながら…

少女　なんて不思議なお星さまでせう！

少年　あの星がかゞやきはじめると、人々は途を下つて行きます。立派な王様達や、祭司や、預言者達が。その人達はみんなベツレヘムに行くのです。あのかゞやく星の下にあるベツレヘムの町へ……

少女　なぜその人達は行かなければなりませんの？　ベツレヘムの町へ……

少年　なぜつて、今夜その町に一人のとほとい嬰兒がうまれ給ふにちがひないと、昔

の預言者が云つたんですよ。そして、その嬰兒は間もなくこの世の王様におなりになるだらうつて！

少女　まあ！　王様に。

少年　えゝ、王様にですよ、どの王様よりももつともつと立派な王様に……（あこがれる樣に遠くを見て）僕は…　僕はその王様に會ひたいなあ！

少女　まあ！　あたしもその王様に會ひたいわ、（いぶかる樣に少年を見て）どうしてあなたはあの人達と一緒にねらつしやいませんでしたの？

少年　だつて誰かゞこの羊達を守つてゐなければならないでせう、それにあの人達はみんな行かなければならなかつたんです。あの人達はひるま何氣なく町に出かけて行つたのです、そしたら町は大變なさわぎでした……

少女（せきこんで）　あゝ、あたしにきかせて下さいな！　今日あの町におこつたことを。

少年　あの町の白い道を王様達が通つて行つたのです……（かるい身振りを示しながら話す）色々な色の糸で不思議な模様をぬいとりした長い上衣をきて、頭には虹の樣にひかる孔雀の羽根のついた帽子をかぶつた東の國の王様！　金色の着物を着て、まつかな靴をはいた色の黑い南の國の王様！

少女　まあ！　金色の着物に赤い靴！　そして黑い色の王様のお帽子は？

少年　ピカピカひかる寶石のついた頭布をおつむにまいてゐられたそうです。それから毛皮の着物に金のかざりのついたとんがり帽子、白いおひげの北の國の王様！　王様達のあとからは、象や駱駝やまつ白なロバ達がたくさんな贈物をつんで、ベツレヘムの町をさして通つて行つたそうです。

少女　まあ、どんなに素的だつたでせう！　それでその贈物はどなたにおあげになるんでせう。

少年　勿論、今夜あの星の下でおうまれになる嬰兒にさゝげるためにですよ。あの人

達はそれをみんな見て來たのです。あの人達は一晩位この羊達をほうつておいても大丈夫だらうと云ひました。それで、僕もあの人達と一緒にあそこの四ッ辻まで行つたのです。

少女　だのになぜ引きかへしてゐらつしやいましたの？

少年　僕はあの可愛い羊達のことがとても心配になつたのです。もしや、今夜誰もゐないすきに狼が出て來やしないかと思ふと……

少女　まあ、ほんとに狼が出て來ると思つてゐらつしやるの？

少年　出て來るかも知れません、だから僕は今晩、羊達と一緒に野宿しやうと思つて歸つて來たのです。

少女　だから、さつきあなたは泣いてゐらつしやいましたのね！

少年　僕はほんとに泣いてなんかゐませんでしたよ。僕はそんな弱蟲ぢやあないです僕はあの時、丁度考へてゐた處なんです…ベツレヘムの町では今頃どんなことがおこつてゐるだらうなあと思つて……そして、僕も、その出來ごとのすべてを見たいのです！　とても、とても。

少女　私も見たいわ！　こんなすばらしい出來ごとは、もう決して二度とは見ることは出來ませんわ。（少年の顏をのぞきこむやうにして）　ね！　二人で參りませうよ！

少年　えゝ、でも……（しばらくまよつてそれからはつきりと）　僕だめです、僕はあの弱い羊達を狼のきばから守つてやらなければなりません。僕は約束したのです。僕には責任があるのです。どうぞ、あなたは一人でゐらして下さい。

少女　まあ！　つまらないわ一人で行くなんて！　こゝからベツレヘムの町はとても遠いのでしよ？

少年　いゝえ、そんなに遠くはありません。この丘の下の道を右に、ずうつと行くと塀と門の見える處に出ます、そこがベツレヘムの町ですよ。

少女　どこかその邊にたべものを賣つてゐるお店があるでせうか？

少年　（一寸頭をかしげてうたがはしそうに云ふ）さあ、僕は知りませんねえ。お店はあるでせうけど、何しろ今日は一日中大變な人出でしたから、お菓子もパンもみんな賣り切れちやつたかも知れないなあ！

少女　（かなしそうにうつむいて）あゝ、こまつたわ、あたしはとてもおなかゞすいてますの。長い間何もたべなかつたんですもの。

少年　え、何もたべなかつたんですか？　かはいそうだなあ！　ぢや、一寸待つていらつしやい、僕の夕ごはんのパンを半分づゝ食べませう。

（彼は岩のかげから小さな包みをとり出し中からパンをとり出し二つにわつて一つを少女にわたす）

さあ、このパンをおあがりなさい。

少女　有難うございます。（パンをだいたまま話す）私は寶物を山の様につんだ象や駱駝やまつ白いロバが見たいわ！　それから寶石をちりばめたすばらしい着物をきた王様達が見たいわ！

少年　僕はそんなものは見たくはないんです。

少女　あら、なぜ？　金色の着物なんてすばらしいぢやないの、虹色の孔雀の羽根だつて……

少年　僕はその嬰兒を見たいのです。

少女　では、私と一緒に行らつしやればいゝのに。

少年　僕の行けないわけはさつきお話した通りです。僕は羊達の番をしなければならないのです。

少女　だけど、それは隨分馬鹿氣たことですわね！　考へてもごらんなさい、あの寶物や贈物をもつた、きれいにかざられた澤山の象や駱駝、それから美しい不思議なみなりの南の王様、北の王様、東の王様、そうして王様の中でも第一の王様の御誕生、あゝ！　見たいわ、見たいわ、あなたも、こんなつまらない羊の群を守るために野宿なんかなさるの、およしになつた方がいゝわよ。

少年　しかし、若しこの羊達の上に何か事が起つたら……

少女　町におこつてゐることを想像してごらんなさい！　こんな二度とない出來ごとをあなたがお見おとしになつたら、あなたが大人になつた時、ちいさい人達に、嬰兒を拜したことについて、お話してあげられないぢやありませんの？

少年　（叫ぶやうに）僕もそれを考へたのです！　そうして行きたかつたのです。今までしたいと思つたことの何よりも、僕の生きてゐるうちに起る何ごとよりも……

少女　（少年の手をとつて）　さあ、行きませう！　ね！　野宿なんかするの馬鹿らしいことよ、ね！　一緒に參りませうよ！

少年　（岩の向ふの群を見ながら）僕、僕はあなたと行きたいのです……しかし、あそこにすはつてゐる羊達をごらんなさい。あの弱い羊達は、羊飼をどんなに賴りにしてゐることでせう。僕があそこに行くと、羊達は僕のところに鼻をすりつけて來るのです。そうして、小ちやな子羊達は、幼い子供の樣に、僕のあとを追ひかけて來るのです。僕はあれらに一匹づゝ名前をつけてるんですよ。それだのに、もしも僕の行つてしまつたあとで、狼でも出て來たら僕はたすけることは出來ないでせう。（聲をおとして）ね、おねがひだから、僕にもう何も云はないで下さい！　あなたは一人で行つて見て來て下さい！　僕は羊達とこゝにのこつてゐますから。

少女　あゝ！　やつぱしだめなの！　あなたはお莫迦さんね、お莫迦さんよ！

（少女歩き出す）

少年　（ふと岩のそばの半分のパンの包みを見てそれを持つてあとを追ふ）　一寸待つて、お待ちなさいよ！　（追ひついてパンをわたす）　これもみんなもつてゐらつしやい。

少女　何んですの？　これ？

少年　（無造作に）　それは僕の夕飯です、あなたは、あの町につくまで、とてもおなかがすきますよ。

少女　だつて、あなたも、おなかとおすきになるでせう？

少年　えゝ、少しはね。だけどあなたは女の方だし、僕は、僕は男ですもの。

少女（微笑んで）　有難うございます。ではいたゞいてまゐりますわ。さようなら！　坊ちやん、羊飼の坊ちやん。

少年（おどろいて）どうして、あの女の子は僕のことを知つてゐるんだらう！　そしてどこから來たのか知ら？

（彼はしづかに岩の方に行き、そこに腰掛けて頰杖をついて考へこんでゐる。少女間もなくかろやかに登場――彼女は茶褐色又は青くひかりを帶びた、やわらかい長い着物、それには無數の小さな光つた星がついてゐる。又、頭には大きな星の冠をかむつてゐる。その時、照明あかるくなる。かるやかに少年の方に近づき、非常にしづかなやさしい聲で話す）

少女　羊飼の坊ちやん、羊飼の坊ちやん！

少年（おどろいて顏をあげ、目をみはり）　なんですか？　おや、あなたでしたか？

少女　えゝ、なぜそんなにびつくりなさいますの？

少年　でも、あなたはさつきとは大變かはつて見えますもの……

少女　いゝえ、私はちつとも變つては居りません。さつきは、あなたに私のほんとの姿を知られたくなかつたものですから……

少年　あなたはどなたですか？

少女　私はあなたの星ですよ、羊飼の坊ちやん！

少年　僕の星ですつて？

少女　そうです、あなたの星です。あなた方は誰でもみんな、御自分の星を一つづゝ持つてゐらつしやるのです！　その星はいつも高い空の上で、あなた方のなさることをじつと見つめて居ります。そうして、あなた方がいゝ子供だつた時には、その星は、あの高い空にピカピカとかゞやき、惡い子供になつた時には、とてもみにくい黑くさびついたきたない星になつて、空の遠くの遠くのまつ暗い處にはいつて行つてしまふのです。そうして、その星はその人が再びよい人になるまで、そこにじつとしづんでゐるのです、それは、ほんとに不思議な星なのです。

少年　しかし、あなたはなんと美しいお方でせう！

少女　そうですとも、私はあなたの星ですもの。羊飼の坊ちやん、あなたの星はいつまでもきれいでなければなりませんわ。私はあなたとおどるためにおりて來たのです。あなたに幸福をさし上げるためにこゝへやつて來たのです。あなたのお望みのものはなんでもさし上げますわ！

少年　けれど、僕は、僕は何もほしくはないのです、たつたこの世界にひとつの望みは、僕はあの嬰兒をみたいのです！

少女　では、一寸お待ちなさい。わたしが今あなたのお目々の中にある小さな星の屑をふきはらつてあげるまで。

（靜かな音樂。少年岩にもたれて坐る。少女しづかにおどり出す。少年は次第に岩にもたれたまま眠りにおちる。遠くにクリスマスの鐘の音がひびき、照明次第に暗くなる。少女は舞臺の片手にかくれる。）

第二景

處・　前景と同じ

時・　しばらくの後

人・　少年
　　少女

少年は岩にもたれて眠つてゐるが、ふと目をさまして、あたりを不思議そうに見まはす。さつきの少女はいつか舞臺の片端に立つて少年をみつめてゐるが、少年はそれに氣づかないらしく、ひとりごとの樣に

少年　おや、僕は眠つてゐたのかしら？　あれはほんとの夢だつたのか知ら？　僕ははつきりと見たんだ！　あのとほとい嬰兒のお姿を！　そこはまづしいたゞの厩だつたけれども、まるで宮殿の樣にひかりかゞやいてゐた、それからあの寶物をさゝ

お留守番をした羊飼

げた三人の王様達も、羊飼達も、みんな嬰兒のまはりにひざまづいてゐた――僕はたしかにこの目ではつきりとそれを見たんだ。そして、ほんとにその場に行つて來た様な氣がしてならない。しかし、あれが夢だつたのかなあ！

少女　（その時）羊飼の坊ちやん、あれは夢ではありません、あなたは、それを一生涯きつとおぼえてゐなければなりません！　あなたが大人になつた時、小さい人々にお話するために。それは恐らくいつの時代にも、今まであつたどの物語よりも一番美しいものにちがひないのですから。

少年　今迄あつたどの物語よりも一番美しいものですつて。あゝ！　僕はそれを見たのです。僕は、僕はほんとうに幸福です。ほんとうに幸福です。

少女　（しづかに）羊飼の坊ちやん、なぜなら、それは他の人々の幸福をつくるためですから。もう明るくなつて參りました。やがてあのとほとい嬰兒のために、かゞやかしい最初の朝がおとづれて參ります。私は空にかへらなければなりません。最後に私は不思議な言葉をあなたにおゝくりいたしませう。それは、「若しあなたが幸福になりたかつた時には、先づ第一にほかの人の幸福をつくつておあげなさい！」

少年　僕、決してその言葉を忘れません。

少女　そう思つてあなたは空を見あげて私をごらんなさい。坊ちやん、私は空のうちで、一番小さな星です。恰度、あなたがこの地上で、一番小さな羊飼である様に。私はお月さまのそばにゐる小さな考へ深い星です……（舞臺の端の方に行ながら）さようなら、羊飼の坊ちやん、ごきげんよう、私は小さな星です。いつもお月さまにだつこしてゐる。おぼえてゐて下さいね、羊飼の坊ちやん！

（彼女退場）

少年　さようなら！　僕の小さなお星さま！　さようなら！

（少年は手をふり乍ら舞臺の端まで少女のあとを見送る。美しい音樂でしづかに）

幕

昭和十年十月廿五日印刷
昭和十年十一月九日發行

天國の鍵
〔定價金五拾錢〕

著者　川村信
東京市神田區錦町一丁目六

版權所有

發行者　佐藤元重
東京市豐島區西巢鴨四ノ一二六

印刷者　澤田文雄
東京市神田區錦町一丁目六

發行所　基督教出版社
電話神田　三五一四
振替東京　一四五三

Printed in Japan

一年中の教話資料

カワムラ・マコト著

馬子とクツヤシ

定價八十錢 送料六錢

著者の言葉——

私はこの一卷に兒童のための教話として、既に折紙づきの世界的のものばかりを數十篇、最も平易簡明にあらたに譯述したつもりである。

現代、兒童の宗教的教話乃至は讀物と云つたものは實に多種多樣にあるが、ほんとに彼等の生活を土臺とし實生活に生きたる指針として役立つものはあまりに少ないと思ふ。宗教々育にしろ、一般情操教育にしろ、彼等の生活にぴつたり適合した生命の通ふ教育でないかぎり、全て無駄な努力である。

私はこの一卷を、その指導者は勿論のこと日曜學校をはじめ幼稚園小學校乃至は中學程度の少年少女諸君に、この現實の生活に力强く正しく生き得るための指針として、大きな希望と自信とをもつて贈る次第である。

東京錦町一神田區 基督教出版社 振替東京一四一五三 電話神田三五四一

基督教文庫第二期刊行

上澤謙二著・五十二日曜に應じた五十二說教集

一年間兒童說教

代表的說教選第一集

これ一冊あればいつでもSSの行事と自然の季節に適した子供への說教が出來る・・・・・・・・・・・・・・・

これ一冊あれば日曜學校の講壇は一年中新鮮で有力で興味深く子供を引きつける・・・・・・・・・・・・・・・

これ一冊あればSSの禮拜はガラリと變つて其內容は豊富になり空氣は緊張する・・・・・・・・・・・・・・・

これ一冊あればいかに兒童說教を語るべきか作るべきか秘訣が自然に解つてくる・・・・・・・・・・・・・・・

四六判 三百頁 美裝函入 定價壹圓參拾錢 郵稅拾錢

內容の一部・特殊日

新年 紀元節 受難週 イースター 進級式 母の日 子供の日 花の日 夏期聖書學校 振起日

世界日曜學校日 子供への傳道說教 決心日 世界禁酒日 平和記念日 感謝日 聖書サンデー クリスマス 年末

東京錦町一神田區 基督教出版社 振替東京一四一五三 電話神田三五四一

基督教文庫第一期刊行

聖書物語

1	アダム・ノア	蘆谷蘆村著
2	アブラハム	同
3	ヤコブ・エサウ	高崎能樹著
4	ヨセフ	岩村安子著
5	モーセ	三浦關造著
6	士師（上）	蘆谷蘆村著
7	士師（下）	同
8	サムエル	西阪保治著
9	ダビデ	沖野岩三郎著
10	ソロモン	横山美智子著
11	エリヤ・エリシヤ	上澤謙二著
12	大預言者	野邊地天馬著
13	小預言者	同
14	エステル・ルツ	村岡花子著
15	ヨブ	賀川豊彦著
16	ダニエル	上澤謙二著
17	エズラ・ネヘミヤ	日高善一著
18	舊約外典	蘆谷蘆村著
19	マカビス	鑓田研一著
20	イエス（上）	上澤謙二著
21	イエス（下）	同
22	使徒	齋藤敏夫著
23	パウロ	上澤謙二著
24	新約外典	吉田源治郎著

内容及裝幀

四六判 二百餘頁
二色刷表紙美裝
各卷挿畫入
全二十四冊
二冊一組箱附

頒布方法

毎月二冊一組配本。豫約者のみに頒つ。毎月拂に限り一圓。之は最終の代金に充てます。申込金はお返しします。

規約

實物見本	送料共
內容見本	拂込
申込金	一時拂 十圓（申込金不要） 二回拂 五圓五十錢（同） 毎月拂 一圓（最初の月は申込金共貳圓拂込のこと）
御申越次第進呈	一冊十二錢
一組金壹圓	

東京市神田區錦町一丁目

基督教出版社

振替東京一五三四
電話神田三五四一

355
927

Y5-609
*80W19915 *

基督教出版社版